

# 方 向

全卷

(1953 年～1996 年)

## 『方向』はしがき

ここに掲げるのは原田憲雄・中新 敬両氏が方向社を組まれて公刊された雑誌『方向』の全巻である。最初のころは見ての通りガリ版刷りの同人誌で、それぞれの論文をそれぞれがガリ版を切って、印刷し、表紙を着けて発行された。それは手跡の違いから分かる。発行部数は第15号の記載に見られるように四十部であった。以後どれほどの増減があったのかは分からない。第17号まではガリ版で、それ以後はワープロかパソコンによる原版をもとに油印されたか、プリンターによる印刷となって、表紙がなくなる。途中までは両氏の共同作業であったようだが、後には原田さんの独力による発行となったらしい。創刊は昭和28年西紀1953年3月20日、終刊は第174号1996年1月10日。『方向』全174号は、実に四十三年にわたる独立した研究者の苦闘の足跡である。終刊号には終刊の辞などというものはなく、詳しいことは分からないのだが、原田家に保存されている分と配られて所持されているものが一致し、また1996年は原田さんが京都市中から滋賀県大津の田上町に移られた年でもあるので、それで終刊とされたのであろうと推測する。そしてこの雑誌の続編が、われわれがすでに資料庫にあげた『李賀研究』である。以上この同人誌・個人誌の外側から見たほんの概略を述べた。内容にわたっては今後これを土台に研究の発展なり議論なりが起こることを期待したい。

雑誌の現物をもとに一葉ずつスキャンして、ここに見られるようにしてくださったのは高井美香さんである。その労に対して深い謝意を表す。またすでに原田さんの生前に許諾を得たとは云うものの、今度資料庫への公表を許可された長東道子さんにも研究者の端くれとしてここに謝意を表したい。

2023年11月25日、中島長文

訂正用

方向

1

憲  
楫  
藏

吾等は市井の一隅に巢喰い文學の趣味に生くる布衣の徒。素より淺學菲才、文苑に角逐せんと志す者には非ず。たゞ、もの言わざるは耻ふくるゝわざとか、心あるところ語之に従い、筆執れば些かの想詞なきを保せず。勢の赴く所、雜文を綴り蕪辭を陳ね、以て自嘲の資に供せんと欲するのみ。博雅の諸彦が清興に堪えざるは愚癡をお知る、幸いに眷顧を得べきか。若しその後進誘掖の高志を以て一筆の批正を賜らば光榮これに過ぐるなし。文學に生きて墮地獄の苦艱に會せんも亦命冥加なりとすと云爾。

方 向 社 同 人

中 新 敬

原 田 憲 雄

目次

雙

岡

隨

想

中

新

敬

……(一)

——作爲堂主 EOTIME として——

詩

詞のあゝる村

原

日

憲

……(二九)

李長吉詩鈔

原

田

憲

……(三七)

南 京 豆

中

新

敬

……(四一)

死

角の眼

中

新

敬

……(四九)

一言放談

藩札博士  
ボシ中文化  
こびらふ通信

中

新

憲

……(六五)

白

玉

樓

中

の

人

——李長吉をめぐって——

原

田

憲

……(八一)

# 雙 岡 隨 想

中 新 敬

— 徒然草を motive として —

## 幸 福 論

研究に没頭していて日露戦争を知らなかつた學者がいた。その學者は疲勞からわれ知らず解剖台の屍體に頭を突込んで眠つたと言われた。没頭を文字通り實行したのだ。大した悟境であり、凡百の葬式坊主の及ぶ所ではない。餘程一念専心の精神が徹底していったのだらう。

「象牙の塔」は世俗に對してこそ、一種の死角であり、殊に國家が戦争中としまはば、颯風の眼のような存在でもあつか、それ自身やはり戦場である。

いろいろの毀譽褒貶はあろうか、世俗の一切を卻下して没頭するところには自ら高次の價値の世界が構成されるはずであり、此の真、中世に於け

る「草庵」とし一脈相通するものが見出されるたろう。一脈相通するものとはさうまでではなく、道に對する一念專心に他ならない。「草庵」が抹香臭く、「象牙の塔」がアカデミスムの臭臭を放散して俗臭にこびないのし、そこに住む精神が純一であればこそなのたろう。兼好が二十世紀に生とまうけたらう、或いは「象牙の塔」に立籠つたかも知れない。

先と云れ日露戦争当時の日本にはまださういふ有難い幸福の可能性があつたのだ。所て今日ではどうたろう。呪うべき文明の醜女マス・コミユニケーションの喧騒を極めてゐる今日ではさういふ可能性は藁にしろくもなくなつてしまつた。現に第二次大戦を知らなかつた學者の例は聞いた試しかない。若しさういふ人が奇跡的に存在したとすれば、戦時中レジスタンスをやつた學者以上に教信も尊敬に値する。

飛風は眼の中に沈滞する高い精神こそ文化の芽であり、さういふ學者の一人や二人位もたなくして文化國の名おれてあり、さういふ精神總動員のゆとりをなすか敗戦の原因の一つであつたにも相違ない、風船煤煙を學ぶ

位と據りたり、原爆の製造に従事し、學者は論外である。道精神といふものはそれほどにも峻烈であり、孤高である。そして今日ほど「知らないことが大きな価値を持つに至った時代はなからう。それは一方徒然の精神的な方向が文明の進歩と共にその価値を増大することを何よりも雄辯に物語るしのでなくてはなるまい。

だから私は颯風にも眼のふろのを信じ、来べき第三次大戦を知らずに何ごとかに没頭し得る生活に幸福の條件を考えねいらねい一人である。勿論「知らない」ことにも重大な不幸は附随するであろう。日本の敗戦を死らなかつた南米移民の醜態や、今日も南海の孤島などで知らないうばかりに悲惨な生活を送っている日本人のいることを考えると暗い氣持になる。だがそう思うのは私に妄想であつて、彼らは意外環境に適應して、結構口ヒンソク・クルソク的幸福感を楽しんでいるかも知れない。だが、文明の宿命は何時の日に孤島の砂漠にすら巨大な歴史の足跡を刻印して彼らを下ら絶望の深淵に突き落とす日が必ず来るのではなからうか。

所て「知らない」ということと「思い知らない」ということは言葉の上  
てこそ非常に近いが、實は遠い對蹠的關係にあることを考へねばならぬ。  
「思い知らせてやるぞ」といわれるほど恐しい脅迫はない。そしてこれ  
暴力主義者の常套的口吻でもある。「思い知らされる」といふほど悲慘な不  
幸もない。多くの日本人が思い知らされた甚い體驗の中に生きてゐる筈だ。  
思い知らされたために我々は幸福になる權利を主張することかできるの  
だ。そういう人達こそ日本を幸福を國に育て上げる資格をもつてゐる人達  
なのだ。日本にとつてそういう人々を一人でも多ければ多いほど幸福なの  
だ。所が現實に日本は依然として餘りにも悲慘で有り、暗澹としてゐる。  
これは何故か。

今日、日本の悲劇は傷手のいへやらぬ敗戦國だからなのではない。思い  
知らされなかつた連中が餘りに多過ぎるという事實そのである。だから  
「知らずい」といふことと「思い知らない」といふこととの間には跳越え  
難い深淵が横たわつてゐると考へ得る。今日の日本人はもつと此の深淵を

自分の生活に反芻せねばならぬ。それか二十五時の宿命下による日本人の幸福論の重要なテーマであらう。

兼好は六百餘年前日本人のこういう宿命と幸福とを予言した先覺者である。『土下しうこそ物狂ほしい』のは全ての先覺者の宿命でもあらうか。今日こそ「物狂ほしい」一念發起に日本人が皆その心魂を傾けて徒然草と味讀すべき秋である。

### 粹 法 師

中國には古來、臥薪嘗膽を始めとして幾多の大江を陰謀の姿勢がその封建的社会性を反映してモラルの特徴とされてゐるか、韓信の股くくりも亦その代表的なものの一つである。古來文化的に中國と先師として仰いで來た封建制に呻吟する、と、餘儀なくされて來た日本にその雛型が乏しかろうとはしない。否、むしろ事例は封建的虚態に及例するものであれば、先師を凌駕して出藍の譽をうたわれていい。犬と呼ばれて犬に有り切

今、足槍にさしはさんで付き出されたサシミをうまそうに食って、あまけ  
に足に、いた汁をきれぬに當ぬたのことは、韓信にも考らぬ大度であらう、當  
膝以上の陰忍大度と言わねばならぬであらう、然し我々には、さういふ行為に  
感心する前に、何故東洋にはさういふ侮辱や屈辱が傳統的な根柢として存続  
するのたろうかと、行為の背後にふも人権思想の希薄さについて及者して  
みるのかよさそうである、日本人が土足で踏みかためて来た封建的社會性  
といふものは、その作用の基礎が強固であれば、正るほど、吾々の日常生  
活の意識下の領域で、とんでもないふりにとんでもない作用をしようといふ  
言の限りである。

和らここにとり上げた一例は、何んか一例に過ぎぬか、やはり日  
本民族の風土性に強く根ざしているのだらうか、一例とは日本をよく利用  
（？）される股脈鏡とか股のてきとかいふ特異なホースによる観望の方法  
である。

あれば確かに土下座が習慣化して、た封建時代、日本人が偶然に發見し

た一々の極めて卑屈を極めて穢褻を觀察のホリスだ。私の判断は或いは間違つてゐるかも知れないが、私にはどうもそのように思えてならないのだ。たとえそれが間違つてゐるにしても、さういふホリスが如何にも封建的日本人の姿勢として適當してゐたことは確かであろう。エエいう醜態な姿態による風光の觀賞法といふものは世粵靡しと雖も恐らく日本以外の何處にもその例を見ないだろう。それだけに外來の觀者にはエキゾティックな一〇〇%満喫させるに足るホリスであろう。日本人の飲酒狂態は全く日本特異の奇習の一つで、軍好し輕妙な名文を以て描き盡してゐる。私に股眼鏡し亦、人間の盒裁趣味として永い封建的壓力のしからしめた所であらうと推論してはばからない。所が酒を飲んで狂態の限りをつくすのは他人眼には迷惑千萬ても、本人は至拙勝手な憂晴して、平素の封建的抑壓感への安全弁として、不禮講の各のもとに世間も半ば公認してゐるのだから始末に悪いが、この股眼鏡し亦、人眼には醜態であつても、やつてゐる本人には不思議に効果的な觀賞法たるに相違ないのだ。正眼に構えて熟視す

風景よりしやういふ逆轉した眼球にとらえた映像は又一段別趣の美的要素が加わり、異質的な情痴美が不思議な伴奏的效果をしなうしていることは日本人なら誰しも肯定する所であらう。

だから日本が文化観光國の看板をかかげて再建を企圖するのなら、外來の客にさういふボリスと執らせることによつて彼らのエキゾティシズムを刺戟するのが效果的であらうといふことになりそうだが、所が、彼らかそれと率直に受入れたらどうか、恐らく民主的を教養を身につけた彼らは土下座と共にいとわしい醜態として擯斥することだらう。うっかりせんことを懲德しようものなう折角標榜した文化観光の鼻柱をしたたか打ちのめさへかわないかう用心するにこしたことはないからう。

借、日本人特異な飲酒の狂態を完璧に描破し盡した兼好は何故かういふ日本人特異な姿勢を見逃しているのだらう。日本のな趣味觀の一切をこめて徒然草一卷に凝結させた筈の兼好の筆端にかういふボリスかとらえられぬいは不思議であらう。吾、兼好ほどの教養人にそんな懲德味を説教する

善があるうか。現に彼は百五十四段に巧妙な實例を以て益我趣味を否定して、  
ていさでけなひか。フクデミツクを研究者から横槍が出さうだが、私かこ  
んなことをカ説す了のし實は兼好自身の筆によつて教えられたものである  
ことを告白せざるを得ないのだ。私をして言わしめるならば徒然草一卷の  
中には到了所それか明記されてゐる。徒然草は兼好という高人が常に雙ヶ  
丘の高さから始終此の枚眼鏡によつて觀察描寫した日本人の迷宮的世相の  
圖解であり複雑奇怪な人間像の素描だといふ一言を敢て言わざるを得ない  
ものだ。實に兼好のとりえたる人間像や世間相といふものは何れも兩脚をコ  
ンパスの如く測つて生殖器を知性の優位に擬した獨特の觀察方法であつた  
ことを言ひたい。彼を評した後人が「雙ヶ丘の特法師」とは實に弁珠に言  
ひ得た妙言であり、そのものズバリの通評である。私はその通評にいささ  
か方法的なメスを、例の妙觀の故智にふやかりたく少し切れ味の悪いメス  
を入れたまでである。私の魚眼レンズに虚構せられた徒然草の樂屋裏風景  
の如きは餘りにも醜惡であり、兼好の教養を常に祭壇の上に保存し、おま

たゞ世の徒然享受者たる紳士淑女諸君は、嘘 眉をしりかめられることだろ  
うが、私は事實は飽くまで事實としてフロイドヤソラの手法も亦借用せね  
ば實相の究明は困難であることを言いたい。癡症を病む現實には冷然を科  
學のメスによる切開手術があるばかりである。

眼鏡的觀賞が病的であり、それが正眼視を歪曲すること甚しいものか  
あることに異論はないけれど、そういう自瀆的快美感が封建的世相の重疊  
より必然的に習慣化されている事實も亦同様に否定し得ないのだ。

何故そういうものか美しいか、何故快いか、その科學的な究明は恐らく  
フロイドヤソラの手腕にまかねばなるまいか、吾が癖好はふらゆる他の東  
洋の先驅者と同じく唯その豊かなく人生體驗と鋭い直觀の能力によつてそれ  
を巧妙に使いこらし希代の名文によつて活寫してくれたいのだ。

既に言つた如く徒然享の執筆態度はそういうポーエカ主態となつておれ  
はこそ、彼が言う神韻諷刺として杞え難い、怪しうこそ物狂ほしい、制作  
の心境も自ら言い得た妙言で、一部の訓詁的註釋家のような俗見では我慢

てきないのは意然のことと自得してゐる次第だ。兼好がよやうこそ物狂  
は、いと言つた時には勿論そこに儒佛道三教の混入した該博な教養から來  
る道學者の反省も加わつていたことと事實であらう。だからといつて徒  
然草の目標が單なる趣味論や道義的顯揚にあつたことと云つたら、それは徳  
川時代の頑迷な道學者の近視眼者流の數りを免れまいであらう。そういう  
もので兼好文學の本質は到底理解できるものではない。彼の文學を解く秘  
鍵の一つは此の股眼鏡にあるのだ。そこで「顛倒の相」が何ものであるか  
は、さきつて來了。

顛倒の相とは彼の筆になつたときは正しく股眼鏡によつてとらえられた映  
像に他ならぬ。彼の氣質的に老莊の哲學を好んだのも、それらの哲學が  
何れもさういふポイントによつて把握された人間や世間の眞實（封建性を本  
質とした東洋の風土社會）であつたからには、他ならぬ。

以上説き來ると我れながら「よやうこそ物狂はしくなるべきを得よ  
いふだが、心よ外來の人はその多角的な知性や能力に於て吾々の提

供する股眼鏡を堅く排存すべきではなからう。彼らの求めるエキゾチックイズムはそういうポーズに於て初めて満喫し得ることを改めて認識して、いたたけるたろう。だがワロイドの近代科學的方途によつてその蒙を啓かれゾラの筆とメスとして人間の迷宮相を探求する彼らの素養はこれをも、陳腐の言といふかし知れない。君らも愛唱してやまない吾々のあの「菩提樹」——あの東洋的思惟の釋迦が正覺に達したという、東洋的叡智のシンボルをうたつたあの歌詞にも我々は既に君らのそういうポーズを味わつてゐるのだと。

さて私は股眼鏡の效用を餘りにも強調し過ぎたやうだ。だが私はこのポーズが兼好の觀法は一切であるとは言つてゐない。『唯迷を主としてわれに従ふ時、やさしくしよし、よくし、賢くべき事なり』という第六七段の行文に自ら兼好のしつかりのよきをいささか裏かう一理窺はれて見ただてゐる。

一體人間何時もかっしこいいうせせこましいポーズばかりで生活できる

ものではないことは言うまでもない。兼好もこれを昇落した久米の仙人に巧  
みにとらえてゐる。そしてこれに彼独自の肯定と否定の同時併用、例の舞  
かき雨刀論法の一つだ。としかく兼好は肯定しなかり否定し、否定しな  
ら肯定する。全マの事象をその混沌の原始態に於て直観的に把握し認識せ  
んとする真やはり東洋的睿智の一典型たる特質を失わなかつたろう。そ  
う睿智に對して近代科學を母體として發展して來た形式的辨証家のメス  
徒然草と徒に分析的にのみ見る結果はその眞生命をとり逃し、形骸の中  
に矛盾や撞着ばかりを發見する結果に落ちたろう。彼らは兼好ばかりではな  
い、恐らくあらゆる東洋的知性の殿堂に参入することかたきなかつたろう。混  
んせ兼好文學の室にたつてをやてよる。莊子が面白く描いた混沌の話は兼  
好の人間像について最も適切に言い得た所である。兼好は儒佛道三教に對  
する教養の深さは彼の睿智の藥籠の中に自家獨特なものをたらしめて、相即  
的妙味を發揮してゐるのだが、その端的な人生觀は彼らと縁のない世界に  
寓してゐる。

形式辯証家による徒然草への悪評は何ら徒然草の眞生命にふれたものでなく又批評し得たものでなく、多くは的をはねた流れ矢の如きものだ。下手な鐵砲ではるゝか流れ矢も時として人を倒すことを兼好は教えている。しかし兼好はそういう小児病的喧騒に何ら痛癢を感じない。勿論達人である筈の彼は流れ矢を警戒する用心は怠るものではなからうか。彼は常に餘裕綽々として彼に放たれた矢は見事につかんで見せる。そして釋迦が華を拵つて微笑んだように矢を拵りながら呵々大笑するたろう。だが彼の笑いは惡意は微塵もない。

### 實存

兼好法師は生きてゐる。兼好は二十世紀の今日に於てすら尚かつ日本人の心の問題としてその血液の中に斬新な生命を脈動させてゐる。現に原子爆弾や水素爆弾の驚異的殺人器具が出現して人類の生命が風前の燈火と化した時代なればこそ、彼は日本人の心の中に尚ほ、旺盛な實存を痛感せし

おないてはあかぬ。兼好が生きた時代と今日二十世紀の世界とを比べても直結した時代相に把握できるところは均しく日本人の人間性に対する信頼感が極度に動搖し、人間が自身以外に誰をも頼むに足らないと云ふニヒリズムに見舞われ、その頼るべき自身をすら眼前の燈火としか考えられかねた荒蕪の時代を指摘すれば足りよう。そしてさういう無常の世なればこそ、そのニヒリズムを要素として萌え出た靈魂の芽は徒然草の一巻に妖しくも美しい睿智の旅を咲かせたのである。されば兼好自身の問題が我々の二十世紀のモラルに直結し得る所以である。

兼好法師は法然上人の親鸞上人や日蓮上人や道元禪師等同時代の暗澹たる末世の世相が生んだ傑士偉人の一人として、同一時代的基盤に立脚してその存在の意味を考えざるを得ない一人なのだ。彼らと立場の異なるは、いさゝか、緇衣團扇の出家者でありながら、身は洛外の一草庵に閑居する隱道者として、いたすら筆硯にその睿智をそそぎ出し、何ら宗派宗門の形式に身をおぼらるることと欲せず各聞利縁を追求しなかつた。其のこゝろが無礙

を求めざるは西洋に見出される如き生活態度は、それだけ文人的天稟に  
憑れた多情多感な宿命として強烈、親鸞等の祖師開山と異つた親近感に於  
て今日も日本人の血管の中に彼の生命が生きてゐる理由でありしやいか。  
徒然草　その名はたとえ徒然である、その兼好の時代は前述の如く暗雲  
色く重くこめて天日の晴朗はたえて望むべくしなかつた、兵馬倥傯の時代で  
あり、そのモラルは皮肉にも時代の鬼子的性格に發芽した矣、その内容に  
矛盾も持著等物狂ほしい迷宮的錯躰がその反映を見せてゐるのれ必然の理  
と考へられよう。

彼は一介の隱遁僧に過ぎなかつたけれど、その教説には不思議に桂香の  
奥氣がなく、死を説き無常を強調する仏教的諦觀に於てすら生氣溢るるほ  
かりの睿智を閃かせる、末法時に蠢動する人間像や世間相はその物狂ほし  
い筆端に餘す所なく描破せられ、眼もあつた生命の哲學が妖花の如く笑  
い出たのは彼の文學者的素養の隨筆というチャネルに開眼したこゝによる  
ものであらう。歌人としての兼好は和歌の四天王の一人としてカヤアナリ

ズムの名聲の虚しさを悟、たのみてあり、やういう道徳の果に彼は隨筆と  
いう獨壇場に登場するのである。私は今日第二次大戦後世帯チヤアナリス  
ムを風靡してゐる實存の哲學の喧騒を厭離したいので、狂瀾の祥雲も  
一歩身を退けて、徒然の閑寂境に人間の歸趨を直指する兼好の心術に參照  
したいと念願する一人である。

兼好自身し縞衣圓頂は當時のチヤアナリスムに對する抵抗の姿勢であり  
ながら歌道チヤアナリスムの波にしてゐるばれ、乞われざるまに貴顕紳士  
の歌合で等社交會に引出される機會も多かった兼好は誰よりもチヤアナリス  
ム的喧騒の何ものであるを身にしみて体験しつくしていた筈だ。やうい  
う苦い體驗なくして画き得る筈とてなく、詩人を遇する術を知らなかり、  
同時代の世俗的無會に對する止みかたの詩精神の扶議を我々ほそくに讀み  
へきてあらう。

チヤアナリスムは今日地球に住む全生命を凶惡なマス・コミニケイ  
ションの蜘蛛の糸によつて捕えんとする吸血鬼に化してゐる。人は好む

と好まざるに拘らず蜘蛛の巣にゐかくへく宿命された蝶や蟬としての自  
身を考へざるを得ない。斯る宿命下にゐる現代人に混乱の世相をから隠遁  
閑居の草庵が可成り乏しい兼好の生活は尚か、祝福されてゐたと愚痴も出  
ようものさ、草庵裏に兼好の心境は果して明鏡止水をのみ感じ得たか、そ  
の乏しいその物狂ほしい心境にたゞして見つかない。彼の作品は彼が求  
めた徒然生活とは凡そ縁の遠いものであつたことを實證する詩を著すと  
めてゐる。チャアナリスムというものは何し資本主義社會が招來した  
てけない。何時の時代にも大衆の生活圏にはチャアナリスム獨特な波瀾が  
投せられし、時代の流れといふものはそういう問題の投せられ方の無意  
味なくりかへしたと言へばそれまでだが、然しそれが何時の時代にも冷酷  
な現實といふものだを知る時、兼好の思索した世相が認識できるのである  
まいか。そして第三に世界大戦の對空急なる今日、そのチャアナリスム  
の波に乗つて實存の問題が派手を風姿で扱手を叩つてゐるのだが、僕一個  
人にとつては實存哲學は既に最も痛切に僕自身の血染の中にも認められるの

である。兼好の徒然草がそれを指摘してくれたのである。僕は今更ゆきたけの合わないう船來の中古品を裏返して着たり仕立直して着たりしようとは思わぬ。

流行というものは多かれ少かれチヤアチリスム血縁者であり、浅はかな仇浪に生住異滅を繰返すことを本質としていふらしいが、今日実存哲学を振りかざしている手合いの大げさな舉動に思ひなしか僕は曾て帝國軍人がカイセル鼠をなびかせたりサーヘルとカチヤツかせたりしていたやと同じ類型の戯画を考へないわけには行かない。我々は何を好んでさういふものにふこかれの情を燃やすのたろう。浅はかといえはこれほど淺はかな圖はあらず。正に漫画の材料である。日本人の新物喰いは今更始つたことではないか、戦利よりち一敗地にまみれたからといって何れ舶來の実存に飛びつかねばならぬ程吾々の先輩の労苦に満ちた制作に実存を缺いていたとは思えない。茫然も親鸞もそして兼好も我々の血液に最も適應した實存を與えてくれている筈ではないか。勿論その構想の形式に於て近代性

とか世界性とかの要素が、今日のそれに比して稀薄であることは、時代や地域の制約によつて如何とし致し方があるまい。現代世界思潮の動向もその無理からぬことは幸直に認めらるが、本質的要素としては必要にして充分なものがあり、我々の祖先にやはりそれによつて生命を充足して来た筈を有つてゐる。今日日本人が四疊半に住んで茶漬けをすするといふ一事には実存哲学者を軒轅せしむべき陷阱がある。

人間各々生命の危機にさらされること自ら實存を求めよ。我々の祖先も亦自らの安心立命に備へべくさういふのを見出さんと精魂をすりへらしたることなる。理念的に言へば佛敎も儒敎も道家の思想もさういふ要請により探求され發見された實存に外ならなかつたし、最も具体的には天皇といふ象徴的存偶像も亦やはり一種の實存にはかならなかつた。今日では無常の業力圏外に住んでほなく、餘りにしほかない假象性と暴露してゐる天皇もかつては一種の實存であつた。

僕も嘗てはさういふ實存を押し付けられ、その絶對的隨順を示す証左に

軍服を身にまとひ南方の野戦にまでつれて行かれた。軍服は僕には  
學生の制服以上にとりもピッタリしなかつたけれど、文句をいわずは素  
直にそれを着用した。だがそういう不適合に些かの抵抗感も示さず直に妥  
協し順應したわけではなかつた。その外見は抵抗というには餘りにも微弱  
であつたが、徒然草の一巻をそのポケットに忍ばすことはやはり一種の抵  
抗感覺として大きな効果のあつたことを今以てほほえましく感じていよう  
のだ。何だつたらぬと思われろ方は嘲笑われるがいい。當時の僕にはやれ  
つつ一杯の些か自慰的な、感傷的なといつてもいい抵抗感覺でもあつた。  
そして僕は安全であつた。真空地帯でもどうやら窒息せずにはすんだし、毒  
ガスの雰囲気にも耐えることが出来てからしく人間失格の危機を切り抜け  
られた。たのは實に兼好法師の實存に導かれたからである。成る程、僕は  
餘りにも弱く、餘りにも意氣地がなすすまざる自分に幾度も失望しかけ、時  
には絶望すらしかけたことであつたが、それで僕と同様に軍服の着用を  
強制された連中のように人間として人間的に「考へよ」ことを停止して兵



り一巻の文庫本は北斗を交えるに足らざるモラルの源泉である。僕は今日に  
して思えば、南方のそういう生活がどれほど僕の心理革命の地ならしとし  
てくれたことかその効を多とせむを得ないものだ。

それまで大した印象もなく讀過して来た章段が僕の心術の拙さを目ざま  
してくれた。例えば第八十四段の法鏡三藏の話の如きである。「天竺に渡  
りて故郷の病を見てはかまひ、病にふしては漢の食をわがし、た彼の心  
境かしみじみと実感され、心から同情の念を以て納得できたのも実は南  
方矣天下に身を置くという絶好條件を除いて、果してかくまで印象が刻明  
た、たろうかと甚だ心もとない次第である。

「さばかりの人の無下にこそ心弱き氣色を人の國にて見え給ひけれ」と  
いう法鏡の人間の態度への批判はそのまゝ歩兵操典の條文が至上命令で  
ある二十世紀の前半の日本軍人の常套的口吻であり、そういう言動は我衣  
を着る者の風上にも置くまい。破産駈であるとも考えられたが、私も軍服  
をまといながらそういう花し實もをい殺風景な口吻には常に食傷してあり

人間失格の危機にさらされていたのを幸くも支えてくれた、実存の依憑が徒然草のそういう短章であったことを告白せざるを得ない。眞にパスカルの言えり如く人間は葦の如く弱い、だが人間は考へることによつてその弱さを超克して人間として立つことができ。私の場合も兼好がそういう一節にすぎりつくことによつて危く流される危機を脱して得たものであつた。

強権と背景とした人間性蹂躪や人間性否定的な思考判断は何れ日本軍隊にばかり独自なものではなく、兼好が生きていた鎌倉時代境より戦亂の世相と土壤として次第に發達して來た武士道にモラルとして結実し、武骨を氣取りたがる封建的日本人の血液の中に毒針で接種されたのが、それ以後に續いた永い封建社會の各時代を通じて傳説化し、その種子は封建性下を何れりの温床にマラリヤ菌のよりに旺盛な繁殖作用を猖獗せしめ、敗戦後の今日ともし近代的民主化の道程をかたくなにはぐみ續けている日本人の氣質的缺陷である。それは一見情熱的な忠烈の赤誠を相貌として見やに見うけられしように、明らかに人間の自然性を歪曲した封建道徳の一

型である。「武士道とは死ぬことなりと見つけたリ」という一言はこう  
「病菌の發熱にうかされた熱病患者のうわ言であり、葉隠的ニヒリス  
のナニセンスは今後とも日本民族が自ら浄化し超克せねばならぬ血濃の  
主題でなければならぬ。そういうニヒリスティックな暴言に對する弘融  
節の「優に情有りける三藏かな」という端的な一言こそ、砂漠に行き惱  
隊商がオアシスを發見した心境にもほうふつたる目覺めるばかりの一言  
はありまいか。かくして兼好の叡智は拙ない僕にとつて眞に實存の權威  
に優するしかたであつた。

徒然草は見方によればパスカルの葦の日本版だとも、モンテーニユだと  
ツアラウストラとでも言い得よう。それは大河の決瀆せんとするを隻  
つして止めねばならぬやうな人間の危機に際してその岸邊にふる之戰さ  
るがらからくし流されずには白らの實存を全うし得る考えを葦であること  
は相違ないのだ。

第一次大戦當時ドイツの學徒兵は聖壕の中で明日を知らない自分の運命

との對決をツアラソストラによつて導かれ教えられたという。同じくフランスの兵士の背囊にはパスカルの一卷が入られていたではないか。日本に出されたたろうか。僅かに徒然草一卷をポケットにしたのはすことにすら一種の抵抗を感じざるを得ないような始末では文化的比重の價值判定に餘りにも大きなムラを痛感せざるを得ない。

起死さるべきは人間の宿命であり、兼好もその俳狂的無常感によつてそれを力強く説いている。然しそれは世上の緇衣音流の如く生命の倦怠感を以てたそかれ的情緒をかしし出す能のものではなく、發利たす生々の銳氣をみなぎらせている所に今後の民主化過程を照す彼の睿智の今日的な意義を考へる必要を通感する。今日なふその一卷は僕の座右の書である。思えば懐しい親友であり、私のツアラソストラ、パンセでもあるわけだ。

長らくしく書きなむ、と来たが、僕の言いたいのには先人の学究がとかく狂気の世を厭離した一隱道僧であつたという事實を餘りにも先入見的に愛

け入れる結果、それが成心化しては徒然草と遺嬰的、常識人の書として相  
場をくくり、その生々たる活作略の面からよみてをそむけていふ、餘りに  
世俗的、常識的態度に對する反感からの抗議てしある。

兼好の睿智はたしかに行動を激發するような教唆性は微塵もない、とは  
間違ひをわろうけれど、反對に激發され易い心となし、日本の血の氣を  
抑制する、健實な鎮靜作用は、その文學的魔力によつて、契書に冠絶する優  
れたものをもつていふようた。その小の眞の睿智の徳性でもある。

その意味からして、戰場にたすさえよべき言としてパスカルやニイチ  
ニに比して遜色はない、若てより、眞に日本の民主主義確立のためには是非  
再吟味して、その中から拘すべき多くのモラルの再検討が望ましい、書であ  
ると共に、今日、日本の民主化をほむ最も大きな障害は、社会の封建的  
組織や機構以前に、日本人の血液の中に及宿するべき大きな課題があり、  
徒然草が、こゝらを考えてやてくれる、又、て世俗のモラルを越克すべ  
き性格をすらしめていふと言ひ得よう。兼好のレジスタンスの意味を以て

新しいモラルの給源たらしめたい。

徒然草。それは古い革袋に盛られた新しい酒である。

祠のあゝる村

淫樂園のキの鳥獸たち

原田憲雄

伴はもう死んでいた

悲しんでみてもしかなかたがなかつた

人々はそれを知らなかつたのだつた

だから佛のまはりに集つた彼等は

しほらくそこにじつとしていた

この繪の中に描かれた鳥や獸か

それからどうしたかを誰か語らうとしなかつた

彼らの賢さのたあつた

それから人々が忘れてしまつた悲しみのたあつた

ここに集った鳥や獣は佛の死を悲しんでいるのだと  
今でも人々ほ言っている  
それはきつと人々を悲しんでいないからなのだ  
彼らはそれを知っている  
だから今でも佛のまわりで泣いているのだ

涅槃

死んだ佛をとりまいて泣いた 獣たち 鳥たち 草木たち  
み人を滅び  
僕も死ぬたろう  
使の手のない原子爆弾が残るたろう

冷たい土の上には マンモスの骨の堆  
マテゴトンの骨の堆

人間の骨の堆 鼠の骨の堆……

それらの間を流れる観念論の幻影

それから十萬年

ともかく残ったものは物質だけだった

蛇

逃げ出した

錦蛇は

と

人間か言う

錦蛇は

歩いていっただけだ

しちろん

這つていたのかししれをい

歩いていった

またほ

這つていた

錦蛇は

叢をぐるりとまわり

石ころと

瓦と

赤レンガと

それら 人間共が破壊した

ガラクタの間と

散歩した

檻禁したのが

人聞たから

そこから出て

梢をわたる風を聴き

水に映った雲を飲む

ことも

逃亡

ということに~~なる~~やたらう

錦蛇かうつとりしていろと

驚いたり

石を投げたり

犬をけしかけたり

(犬め どうにも人聞くさい)

そして

錦蛇と逮捕した

といっている

人間共

檻の中ても

別に

曰なたほ、こかてきまいわけてほま

錦蛇は

祠のある村

村の祠の神は正月が来るまで不在である

村人は龕におさまった神の繪像に禮拜する

七月の光は牛を踏停にわらせ

村人は畑仕事をやめて晝餉をしたためる

洪水に流れ残った土塔は村の端までつゞき

そこから見えて、鐵路を

兵隊たちが送られて来る

高粱は半ば熟して揺れ

ゆかて匪賊をかくすてゐらう

村の祠の繪像の神よ

村人たちに忘れられて何處を旅してゐるか

正月はまた遠い

苦力は日に七圓 村はすれぬ井戸で水を汲まねばならぬ

貝 殻

コレデリック・マニング

ほくろけいんな ギリシヤ人のようにハダカになつて

シヤツの虱をつゑしてゐる

突然 大気がフんさおれ

あら絹のよりに引き裂かれ

それから ドスン……

ほくらはみんを ちぢこまる

過 三

コレテリック・マニング

ほくらはこの庭で遊んだものだ 遠い遠い

昔のことだ！ 風は若草をうたかせ

花ひらりはリングの枝から散り落ちる

雪のようにはすべてを覆う

すべてを！

李長吉詩鈔

歌成りて

あゝ長歌 衣襟を破り

短歌また白髪を断つ

秦王は見んすべしなく

あゝよばにむらさし燃えぬ

渴きては壺の酒をくみ

粟かみて飢えをしひきき

淒涼と四月は閑きて

地はなべて緑にさけぬ

夜の峯 何ぞ離々たる

明月は石底に落つ

長歌破衣襟

短歌断白髪

秦王不可見

旦夕成内熱

渴飲壺中酒

饥拔陇头粟

淒涼四月閑

千里一時緑

夜峰何離離

明月落石底

石に沿い、さまよひたすね  
れと見るに明る高峰たかねや  
のそめどしきみはけるけし  
歌なりて鬢かみますかゝる

感詠

南山なにそかく悲しきや  
物めく雨は草むらに注いて消えぬ  
こよい長安に秋は深きに  
風の前に老ゆる幾たり  
たそがれの徑みちさまよひ來れば  
さやさやと標林よ  
月たかし、樹にかげもなく  
山なべて白き曉

徘徊沿石尋  
照出高峰外  
不得與之遊  
歌成鬢先改

(長歌續短歌)

何山何其悲  
鬼雨灑空草  
長安夜半秋  
風前幾人老  
低迷黃昏徑  
裏裏青標道  
月午樹無影  
一山惟白曉

たいまつは新しき死人を迎え  
墓のべにおいただし、螢飛び交う

正月

樓かみどに上り春を望めは新しき春は歸り來

柳は黄はみ砂時計砂漏る途し

淡あわとたたよう靄は野にたわわれて

幽かなる風にさゆらぎ草の芽の緑萌え出す

錦の牀にあかときをまた臥す君の肌冷えて

露の臉あけやらぬまよ朝日にむかう

都路を帯なす柳折るに堪えんや

さわわいつかほ花菖蒲、花菖蒲、かたき契り

を結ぶべし

漆炬迎新人

幽墳螢樓樓

(感 詠)

上樓迎春新春歸

暗黄暮柳宮漏遲

薄薄淡靄弄野姿

寒綠幽風生短絲

錦林曉臥玉肌冷

露臉未開對朝暝

官街柳帶不堪摘

早晚菖蒲勝綰結

(正月)

みなとのかうた

横塘よこたにのほとりの吾家わがや

くれないの紗とらを香かみす

青雲せいぐんは頭かぶにわかねてもとどりとし

望月もちづきは耳みみのへいとどめてかざりたまとす

蓮はすかせ水のみづに起り

みなとべにいとさとどめよ

居ゐよるせ鯉こいのあつもの

われもまた猩猩きんぎょうのなます……

襄陽じやうやうの道みちを指さしそね

歸かへり來き人ひと舟ふねすくなきに

かき一ひとぼた今日けふ花はなやけど

もみしほもふすは老おいいんを

妻家住横塘

紅紗滿桂香

青雲教縮頭上髻

明月與作耳邊瑤

蓮風起江畔春

大堤上留北人

郎食鯉魚尾

妾食猩猩脣

莫指襄陽道

綠浦歸帆少

今日菖蒲花

明朝楓樹老

(大堤曲)

南京豆

南京豆

一人の兵隊が

南京豆の畑で死んでいた

南京豆の生臭さが

腐臭にもつれて……

かくのごとく

誰が異国の土壌を肥やしたのか

鯨

中  
新  
敬

雨上りのスラム街は例によつて泥の海だ

そのぬかるみを點々とトス黒い血潮が染めてゐる

この光景はたゞごとではない

何かの重大な犯行かかもし出す

あの重苦しく息つまる零圍氣の中を

おかみさん連が二三人

ぶつぶつ不平をこぼしこぼし

今し配給の鯨肉を買つて歸るところだった

そして

魚屋の台の上には

長方形に分厚く切りとられた鯨肉が

シャイロツクの食欲をすううんざりさせる

怨恨の肉塊をさらされてゐた

鯨よ、その性善にして鈍重な海の野獣よ

南氷洋を血潮に染めたお前は

今、日本の涵菴のめかるみにすら

嫌悪と輕蔑の泡で叩きのめされてゐる

ただお前の血液があまりにも温かかつた故に

お前もやはり二十世紀の地上で

代表的な時の敗北者としての

宿命を甘受せねばならないのだ

お前のトス黒い肉塊を見てみると

極南の蒼海に咆哮したてあろう

お前の斷末魔の悲鳴が

遠い潮騒に乗って、聞えて来る

舌

梅干ばばあのサデイズムは  
雀の舌をはさみ切つて

雀の涙かどういふものかを味わうたらう

あげくの果ばラスコリニコフの

斧の血祭にあげられるのがふちである

もつとウアイタリテイイの旺盛な英雄や豪傑は

たいてい一寸した油断から

逆に雀から舌をかみ切られて

身の破滅を來すことだらう

結果から見てこれは如何にも

支那的なマソヒスムだが

英雄とか豪傑とかいう連中は

こういう嗜虐性にスリルを味わいたがるものだ

三才の舌端火をばいて時代の趨勢に

決定的な標向を與えよのは

ギリシヤの大昔からフランスの二十世紀の今日まで

歴史が繰返してゐる通り

獨裁者はいろいろの假面の使ひわけこそすれ

彼らに要求された唯一の條件は

獅子の舌を持つといふことの他の何てしもない

ところが獅子の舌といふものは火をばいても味わうことを知らぬのだ

だから彼らはいつれ蛇のよつに狡猾な舌をなめあつて

人民の膏血を飲みほしてしまふのだ

だが人民は最後には――来るべき世紀の最後には

彼ら獨裁者の舌をかみ切つて、大いに笑うだろう

そして吾々の人生に暴力者の言葉が否定され

彼らの血肉が吾々の胃の腑にまで意味された時にのみ  
人民は自らの言葉を味わうことができらるう。

ただそれまでに幾百萬過

人民は獨裁者の拷問への最後の抵抗として

自らの舌を咬み切つて

自らの膏血を自らの胃の腑に味わねばならぬことか……

### 鳩

私は無意味に暮れようとする今日の時間をかきちなから、縁側に坐つて、  
残照に映える素晴らしい葛雲に見入つていた。

もう夕闇のかけも刻一刻感じられる頃だった。

頭上に力弱い羽ばたきかして一羽の鳩が向いの屋根に飛んで来て、しば  
らくは一寸思案顔に可憐な小首をかきつけていたが、軒下につるされていた

物干用のハンガアを今宵の格好な宿り木と思つたらしく、ツイと飛立つて、その片方に止ろうと試みるのだが、ブラブラのハンガアは忽ち均衡を失つて、鳩は羽ばたきしなから空中に落ちていく。

そしてまた、もとの場所に落ちて、なほも動搖の激しいハンガアを不思議さうに眺めている。

それかもとの姿勢に静止するころ、また飛立つて、止ろうと努力するとまた、すかさず、前と同じ結果になる。それでも鳩はそれを何度も繰返し繰返し、やはり見せかけの虚構が見破れる。

已に迫つて来た夕闇の中に遠さかりゆく白らの視力を悲しみながらあせつて、鳩のいじらしい氣持に、見ている私も苦しくなつて来た。

これは一体どうしたことだろう。軒下に泣置する一本の横木——それは仲間にはぐれた孤獨な鳩にとつては、夜の恐怖から身を守るのにこよなく幸福な空間であるはずなのに……

鳩にはハンカアの方ラクリがどうしても分らないのだ。

生命と抱するに定る之派を救いが眼の前に分らさかつてゐるのに、それ  
かどうにも自分のものはならぬとき、絶望は待たされねばならない。枝  
垂れ柳を見据えた蛙には救いがあつたか、孤獨を鴉には絶望の夜しか與え  
られない。これが運命と宿命との岐路なのだらうか？

彼の優れた視力も、あの天才的な方位判定の偉力も、今はすべて無意味  
になつてしまつて、空中に溺れるこのか弱い平和の天使は無慈悲な夜が春  
紋なくやつて来たとき、哀れな孤獨者は何の蔽いもない冷酷な瓦の上に、  
丸く小さくうすくまつてしまつた。不安にそののく孤獨者に、一俵今宵は  
とんち夢か訝れることだらう……

死 角 の 眼

中 新 敬

火 食 鳥

戦後の乏しい食生活の中で、米と名のつくものが食べれば、よし南京米の悪臭を放つものであつても有難かつた。日本人はやはり米でなければ恰好がつかない。その他の代用食では生活の本質を噛みしめてゐる實感もなないのだ。けれどもその米飯の中に、寧ろ小さな砂粒が混つていて、折角舌鼓を打つてゐるのに、それとも知らずに噛みくだき、齒でもこぼしたときの不愉快さ、情無さは、吾々の日常茶飯事かも知れないが、最も敗戦を直感させるしものからろう。唯一つ、砂粒にも時代の性格は、端的に反映して、ささくれ石のいわおとなつて重疊して來るのには、碍易させられざるをえない。意志の強固さや決斷の不拔さは、日本語では「石にかじりついて」といふ言葉で表現されてゐるようだが、現に日本人ほど、ささくれ石をかまされ、いわお

の重壓下に呻吟せねばならなかつた國民は恐らく他國に見出すべくもない。他山の石は日本人の現實生活に何らの権威を意味しない以上、の如き歴史の必然性の然らしめるところでもあらうか。

とまれ私には、「石を噛む」ことについては幼い日に奇妙な追憶が、そのうした場合いつも思ひ出の種となるほど、克明に印象づけられてゐる。

私の故郷は四國遍路の善男善女が行き交う瀬戸内海に臨んだある街道筋にあつた。私の祖母も弘法大師への信仰は深く、幼い私に大師の靈験あらたかき話などよく聞かせてくれたが、その一つに大師が遍路姿で諸國行脚の途次ある暮畑で暮の布施を乞うた所、持主の老婆がこれに石を暮て食へうれないといつわつて追拂つた所、その如の暮はそれ以後全部ほんごうの石を暮になつて食えなくなつてしまつたといふ話がある。私がさういふ話といつまでも忘れずにゐるのは單に祖母の口述だけでなく次のような實驗があるからである。

ある日、一人の四國遍路の男が私の所にやつて來た。その男は汚れた白

衣を―その白衣には何か呪文めいた札所の太鼓印が一面にべたべた押し  
あつたし、それが汗や埃で薄汚くよごれてもいたのか、私は日頃そい  
う人たちを見馴れてゐるので、それだけでは何とも感じなかつたし、平常  
から通路の人は決して乞食ではなく皆いい人だと教えられてゐたものだ  
から、その男がただ通り過ぎよばかりなら何とも思はずやり過したであらう  
か、その男はとある路傍に坐り込んで衣角のかけらをバリバリがりがり  
と噛みくたいてはさもうまやうに食つてゐた。偶然にもその場に居合した  
私は、同じく遊んでゐた四五人の兒らとよまりの奇妙さに子供心ながらお  
っけにとられてその強烈な健啖ぶりを見てゐた。

男は、しかたに年寄りではなかつたが永い通路生活らしく體はやせこけて  
骨は、ついていた。その面貌には異常な意志的氣力かみまきつて鋭い血脈が濁  
つた光と放つてゐた。

彼は私たち四五人の子供と、これも好奇心から集つて来た二三人の大人  
に取圍まれて、「私は御飯のかわりにいっしょに石ころを食べます。こ

の石もその浜辺で拾つて来たのですけれど塩水がついていておいしく  
と言いなから何か野獸を思わせる大きい歯をひき出しなから相變らすがリ  
かりはリはりとみかけ石のかけらと旺盛に食へてみせた。そして終りにヒ  
ール瓶のかけらでもあつたらうガラスの破片をとり出して、それもあた  
かも副食物でもあるかのやうにホリホリかみくだいて食べた。餘りにも  
奇妙な藝当だから皆あつけにとられていたが、その男には正しく日常茶飯  
事であつたに相違ない。戦後の生活に小さな砂粒の一口をかみしめて、い  
わしの重壓と受ける私と何という開きがあることだらう。

石を食ひカシスを食べた後で男は今度の前にかけた頭陀袋からロソク  
を五六本とり出してそれを一つに束ね、その冬々にマツチで火をつけた。  
そしてそれを突へ方を先にして口一杯に頬張るといふ藝当をおつて見せて  
くれた。しばらくして出したがロソクは一本も火が消えてはいる。素  
晴しい食後の一服としても言いたげに男は火のついたロソクをかきしなが  
ら言った。「これにのみを眞言秘密の法でやけどしたり怪我をしたりしない

のほかに大師の御利益です。南無大師遍照金剛……私らはとんだ所てとんだ藝当と見せてもらい、大人たちの中にはその男の摩訶不思議なことに感服され信仰の氣色さえ出して實錢を授けようとする者もあつたが、その男は何故か固辭して去つた。

こゝに實見の幼い私の頭を強烈に刺戟しておこらせたのは、いまでも……私はその男と弘法大師の再現が権化であるように思えてしつたがなかつた。男が信仰を告白した弘法大師もやはりあるというように、石ころを平氣で食へたに相違なく、と。大師に布施を拒絶した總持婆の事が石ころになつたというように、話も實際にさもありやうに思えて文句なしに納得できた。

その上、強烈な印象をもち、追憶は年と共にいろいろの機會に私の腦裏を去來してやまない。

戦時中敗戦後、食生活の激變によつて順禮とか道路とかいうものの生活が不可能になり自然消滅的に姿を消したけれど、私の腦裏にはその男がく

わえて口から出したロソクの火が少しも消えなかつた。ロソクの火が  
消えなほかりか、それは食生活の不如意に比例して（砂粒をかき回数に  
比例して）いっし私を見舞つて来た一種の偏執観念ともう、てしまつた。  
三つ兎の魂百までという不實にたゞ通りてある。

現在私は眞言秘密的奇術には信をたかないことにしているけれども、そ  
れもどうやら全的否定ばかりかたくて、その可能性を信じているのではな  
らうか、少くともそういう傾向がかなり強く作用してゐるのではなからう  
かと自分のことからは頼りない氣持でいろいろのを告白せざるをえない。又そ  
の旁に予言者の性格をも考えさせるのは、敗戦の断末魔に食つた二發の原  
爆であり、この人口過剰の火山國では人間は火を食ひ石を食ひ宿命下にお  
かれ彼の如く火食鳥にまで進化するを餘儀なくされてゐる現情勢をまぶせ  
ざる實感として肯定せざるを得ない次第である。そして到底火食鳥になりえ  
ない生活無能者としての敗北感は、飯中の砂粒を噛みしめる都度二重に私  
をこの島國に生を言付けている宿命觀にまで叩きつけられておこなひのた。

亀裂の象徴

象徴とは何時の場合でもバタ臭い解釋なのだ。それはまた致し方ないとしても二十世紀も後半の辰相にある地上において、四疊半は四疊半らしい象徴を床の間に飾ることきやめないのは如何にも牢固として抜き難い風土病現象の一つである。

四疊半の種族は舊態依然として蟹の如くへいつくばつていてそれを有難がることをやめない。蟹は蟹らしく横ばいに新しい文化を請ひべきであるが、象徴に拜跪する蟹の甲羅には屢々敗戦の怨恨が詳に貝現されているのほどうしたときか。これほど四疊半らしい風土疾患が他にあらうか。東海の小島の磯に泣きぬれて蟹となつた岩の詩人には予言者の風半かなか。たらうか。

日本人の趣味はかつて圓滿具足に泣きぬれながら拜跪することであつたが、その圓滿具足にヒビが入るとなるとなるとおそろしく隨喜の涙にくれながら有

難く秘藏したがるのだが、病膏肓とはいえ、風土病もここまで深化してあれば始末に悪い。

ヒビの入った拳銃が四疊半的世帯を制壓するに足るのは日本の風土の傳統的特性なのだ。どうやら圓滿具足は自らの風土の主體的條件に順應して来たようだ。所がこういふ日本人好みの象徴をいさ、颯風園内の函數としてとらえて見ると、その相對的価値ほど衰れをとあるものはあるまい。かつての金色燦然たる偉容も單なるコケおとしばかり過ぎず、その中味はまるで虚空を把むような他愛なされて了。圓滿具足はそもそもの原初から單なる幾何模様にか過ぎず、四疊半よりはむしろ砂漠の産物としてふさわしいものだったのに、何時の頃からか勿体らしい理窟がこじつけられ、しやちこぼって拜跪されるようになった。あ、けなしい話といえはこれほどあ、けなしい話も珍しく、同じあ、けなさいても狐につままれた話にはまた風味もあろうが、象徴につままれた話には味もなければあ、けなしい。と、ころが別に草族でも豊葦原の草族は懐疑のない葦だからこそあ、けなしい

けなきがカラクミとして、の価値が有る質物専門の充頭の骨董屋に利用され  
てしまつたのだから歴史は皮肉である。これは一體悲劇なのか、それとも  
喜劇なのか。

もしと無風地帯として歴史の意味が停滞し易い四疊半的風土も二十世  
紀後半を吹きまくる颯風に對して園外にあるはずはなくその旋風裡にまき  
こまれると亀裂はますます大きくなり風来のように穢弄せられければな  
らぬ。その結果は圓滿具足のヒビはますます大きくなり、考えぬ、貴族  
の眼にもその虚欺性があまりにもはつきして露骨化してくると、自ら圓滿  
具足を否定せざるをえなくなる。『人間は神ではなく、神でない人間は不  
完全のヒビが入るのは当り前であり、これこそ眞理である』という御志し  
な宣言が裏裂の隙から漏れてくる。それはかりてはない。にれでもかとは  
かり割れ目から一本の手が雄蓋のような觸手をよきと出して無闇矢鱈  
に嬌態の花粧をふりまいてゐる。象徴の眞實はかつてもしうたふとほか  
りに、与くまで四疊半的権威を固執して、ちきめられた程それをふり、わして

いる。未だに四疊半の嵩が破れない、考えぬい草族がそういふ筋手の夕  
クトに雷同の癖波とよめかせている。いかなる寒村の駅頭にも振り向き  
られた無意味な換風のように今は一個のソフ下から散らす嬌態の花鈴は  
幻惑されていく。

だが今更ソフトの風壓にそびく民草の如何ほどが嬌態の花鈴に受精して  
實のふとというのだろうか。

### インフエリオリティー・コルプレックス

永い封建的を冬眠によつて歴史を空転させて来たこの國には藝術といえ  
ばあらゆる四疊半的を感ぜばかりか幅をきかせ、たまさか大きなものか出  
来たと思えば底が抜けていふか、夕かかゆるんでいふか何れもたつた。

道徳と経済とはいふも蛙と蛇との存標をはすいたことかなかつたし、政  
治に至つてはゴロツキ共の飯の種に相場がきまつていた。

宗教もいづもゴロツキ政治のふ先棒をかつかされて馬鹿馬鹿しい偶像を

拜して隨喜の法をこぼしていた。

教育は舶來規格の鑄物を造つてそれに金ピク鍍金を施すとして能事お  
われりてゐつたし、科學は……いや科學だけは今日極東の島國の存在する  
理由であると言張したいのだが、原子力で征服された國に奇妙に一何の因  
果かしらないか、原子理論でノーベル賞とやらが光輝燦爛と天下、て來た  
のなどほとんどない御來光であり正しく神國の奇蹟であろう。奇蹟だか  
うやんまものをもつて一國文化の水準を計測されるかどうかは斷定の限り  
ではあるまい。一体これほど泰來的な毛細管現象が地球上のどこかの文化史  
にふつたらうか。

なるほどノーベル賞はお目出たいに相違ない。だが民主國は捕虜に最大  
の光榮を與えるにやふさかてほないやうだが、光榮に満ちたまふで凱旋將  
軍のような國賓的捕虜の見事を垂載こそお目出たさの限りであろう。とし  
かくも、それでも地球は二十世紀の後半を廻轉し續けている。地上の歴史  
もそれにつれて繰返されていゝらしいが、日本人は相變らぬ古池や蛙の打

情的意味に偏執しすぎているようだ。だからこれからの日本人に最も必要なのは井戸の外の空気で、あるいはまた、井戸や古池以外の世界の空気を深呼吸して生きるためには自ら人間の構造を改変せねばならないのは言うまでもなからう。

吾々は日の丸を愛好して来たけれど、世界を照らしている太陽と、島國だけを照らして来た太陽とは自ら意味が違っていることを知らねばならぬ。吾々は世界を照らす太陽の苛烈な暑熱に乾上らぬように、吾々の蛙的・みみず的・なめくじの皮膚を煉成せねばならぬ。それは宴するに古池性を超克することにはほかならぬのだが、相も變らず、プールの水をかきまわして、世界新記録を作ること、で、世界性の探求は能事おわれりであり、そのいふことは、倣注する、慈悲的、情熱の消耗以外に生けるし、しを見出し得ないのは、淺ましい限りである。井戸や古池が近代なプールに化けたからといつても、そこに跳び込ん蛙に何の進化も見られないのか、今日の吾々ではあるまいか。

油 話

豊葦原の瑞穂の國には八百万かうの神々が雑魚寝して狂態の限りを盡していた。考えることをしな。天性陽氣な日牟人ですうこうした神々の放埒無慚な振舞に對しては神無月というよふな休暇の一月をこしらえねば心安さを得なかつたのだ。

然し結局神々はなかつたのだ。歴史の白々しい空間に赤いゴム風船が唯一つ無意味に浮んでいったに過ぎなかつたのだ。そして風船玉は考えることをやめてしまつた者の眼に浮んでいるといふ幻想から宇宙の最も輝かしい星と錯覚させたまでである。そして風船玉の中の國上には永い永い無意味な時間かよとんでもいた。

神々は風船玉の中で放歌高吟し狂態の限りを盡した。風船玉は最大限にまで膨脹していった。それはナンセンスを喜ぶ人々によつて高天原への郷愁であるかの如く意味づけられ隨善の淚を流して拍手かうられた。もちろ

く彼らに風船王が破れさせ神々の風塵の如く虚空にほれ散る可能性につ  
いては夢想たにしかたがなかつた。

こころは神々を神話が天日から天下へて来た富存の風塵によつてけしと  
はさねおけならなかつたのは餘りいしあ、けい、簡單明瞭なことからあ  
る。もともと簡單明瞭なことからか盲いた民衆には親得でよくかつたけ  
れども、あまたて強烈な音響と熾烈な色彩で見事に圖式化されたのでは如  
何な盲人達とて納得されざるをえなかつたろう。これは一作悲劇なのだろう  
か。それとも喜劇に属していつたろうか。たゞそれはイカルスの場合よ  
りしれ、と目明をカンメンスであることには相違なからう。そして墮ちて  
来た風船王の残骸の虚しさで醜くさ。こねか、い、わ、ゆ、瑞穂の國を偽らさる  
正作であつた。またか、結核患者の吐き出したあのねば、こ、血痰と思わ  
せるように、二十世紀の地表の一處を染めぬいた位相は何や、いう鮮りを醜  
態でよろう。

けれども眞の太陽は依然として毎日に美しく燃えつづけていゝではな

か。そして風船王を破壊したのは太陽の使喚した微粒子であつた。たゞし何の  
たゞ皮肉な現象であらう。今こそ虚脱者の眼にまじり込んで来る太陽の  
美しさに虚心に眩惑されるべき時である。

かつては風船王によつて占められていた空間の如何に白々しいことよ。  
大和魂とほその虚空を温存として育つた之に他ならなかつた。武  
士道とほ死ぬることと見付けらるゝ。ひげをよか言や。実にそれは之に  
の路傍に打棄てられてある道標の文字としてふさわしい。考へなげ樂天家  
はさういふ託宣に風に散る櫻花の片鱗と感傷してゐたか。何という虚しさ  
だらう。何という危陰千万なる石ころであらう。

すべての日本人か神國の民々宿命としてこゝろした奇怪なる石ころに顛蹶せ  
ざるを得なかつたのだ。一倅せ史の如何なる他山にかくの如く奇怪なる石  
ころをかかつてゐただらうか。さうだ。風船王の時間と空間のちくなき醜さ  
を厭離して日本人の誰かそれに耐うべく選ばれただらう。

あゝ、現実の泥沼かう早く足を洗いたいものだ。今や染め直さるべき

は新しい地表ばかりでは無い。色彩を喪った蒼白な靈魂にまで、あの新しい燃える色彩を——原子核破壊と契機として生み出されるあの旺盛に眼を射る生彩を創造する術はないのだろうか。再び天空への解放を希求することの虚妄なるを知って、一本の葦として生き得ない、この不毛の底無し泥沼に無間地獄の無意味な時間を弄ばざるを得ない魂に、實存の基盤を踏みしめて生命の凱歌を高らかに唱い得るのは何時の日の神話に属するのだろうか……

一言攷談

落札博士

敗戦を契機として旧來の日本の制  
度や機構はすべて民主化の極大のハ  
ラで塗りつぶされた。これは新しく  
出た日本だとつてどうしてモヤ  
ムヤなく、はなをぬきとてあり、そ  
うするところが長いことであつた。  
職業軍人が抹殺されたのは戦争の  
後軍人として当然のことであつたが  
その軍人と並んでいかめしい位階勳  
等の封建的土台に鎮座ましました八  
百萬の神々の神風一つよう吹かさを  
かへた無敵さゝ暴露し、やほり民主  
化のハケでそくぬりつた人とし  
たか、こゝには官團華社等の肩書だけ

を塗りつぶすことでもうやら命脈を  
保つことができたらしい。大まかな石  
碑の官幣大注や國幣中注の文字が虫  
歯の充填のようになせんとてぬられ  
たままに立っている姿は正に油詰と  
否定された神國の面目躍如たるも  
があつた。

このういふ敗戦現象は恐らくG.H.Q.  
よりの壓力によるものであつた。所  
が、ここには笑止なのは医学博士の肩  
書をぬけらかしていた町の医者がや  
はり塗りつぶしつ流行に同調したこ  
とである。もともと金で買った学位  
なら元々えとクかえせば惜くもな  
らうか、何故かぬいさことをするの  
か、これだけまじかG.H.Q.の命令でも  
気がねでもあるまいかと念矣がつか  
なかつた。  
医者という商賈が多分に營利的  
(これは暴利的)であるだけに、そ

の修業時代よりノ氣質に封建的性格  
が濃く所中ても最も威風凛々ホス的人  
種であつたのが、敗戦を契機に自肅  
自戒し、民衆に愛されたいもの、民主  
的努力のあらわれたい、たう世學博士  
の塗りつゝおしし誠結構ることであ  
らうか、學位と看板にひけらかすよ  
うな医者はたいてい藪藪りようにな  
財すゝ以外に能のない手合と相場が  
ままつておろし、學位が敬遠の對象に  
されて、たのほ既に早くから見られ  
た兆候で、能より鷹を爪とかくすよ  
うに能も、医者はかえつて學位をど  
には厭はしくはなつたものだ、とも  
かく學位をとりつゝおしした蓋が眞に  
民主的の自覺にまで、親切丁寧に患  
者に接し、不当な暴利をひさげらな  
くする、たのちから、これけ明らかにな  
歩の現象として、民衆に喜ばるべきは  
すである。

新制大学乱立のため新制博士が大量  
生産されるという現象が露骨になつ  
て来た、何時かころだ、たか戦争前  
の語たか「おれ博士」というのが出現し  
て一時は「アナリスムの談話になつ  
たことかある、新制博士」の正體かど  
ういうものか、たかたれたし、た  
か、そのおれ博士になつて近ごろ新制  
學界をうじ「うじ」泳ぎ廻つていふ  
粗製乱造の博士は正しく「おれ博士」と  
いふべき新種種である。

代々各大名が自分の台所の不和志を  
前うたれに勝手に自領内に乱發した  
不辨紙幣のことだ、これのやほり討  
建件切を背骨とする経済的暴力行使  
であつた、たのたの日本経済の近代  
化が障害されたかは明治の歴史をひ  
もとくまでしな、今、おれ博士が所も  
あろうに今日民主化を標榜する新學  
制の各大学にき々文化園の文教政策

の美名に於いて後述して来たのと同じ  
こにいう藩札博士なるものの正体で  
ある。旧財界の封建的産物が新学割  
の文教的産物に化けた所に日本の今  
日的実情が看破される。復古調はや  
りとはいいながら歴史の繰返もこれ  
はまた奇々怪々な現象ではないか。  
名目だけいかつい新制大学であつ  
ても、その内容は昔の専門学校にも  
及ばない程度のものであれば、その  
経営面から博士の虚名を餌にして  
学士のレンテルにあこがれる鰯魚共  
を釣うねばなるまい。このこと自体  
幕藩時代の惠民政策が冠文を因襲の  
尻尾を引いていることを指摘するの  
に好資料である。こゝへ一事をし、て  
文化國の二つの階層たる文教政策は  
推して知るべしだ。こゝういふ実態を  
端的にいえば、今日の文化國日本は  
文化の名に於いて空前の暴力崇拜の  
時代であるといわねばなるまい。

今日の日本は文化の美衣をまとつ  
た封建的暴力崇拜の時代にはほかなら  
ない。猫も杓子も文學士のレンテル  
にあこがれ、学士の肩書がひけらか  
したいばかりに藩札博士に年期を入  
れるのは新進文化國民のお目度とい  
戲画でなくしてなんであらう。  
先日某新聞紙の上で明らかに藩札  
博士の一人である某文學博士が二十  
七年度の文化勳章受賞者の人選が不  
当であるとおこがましくもその非を  
鳴らしていった。当局は何故我輩と  
いう存在を忘れてゐるのだといわん  
ばかりの例の鼻息である。(有難い学  
位的作用が頭に來たのであらう)ま  
るで豚がゴソク箱に鼻を突く人だと  
さの旺盛さだ。旺盛さはそれでいい  
として、いわゆる藩札博士のバカ  
バカしさかこれほど露骨に感ぜられ  
たことはない。その鼻息の風壓に辟  
易したのは恐らく私ばかりではない。

まい。こういう親方について、学士將  
業をやつてゐる連中こそいい面の皮  
であり、文化の名がそぞろ寒風層を  
つんかく思ひを察し得なかつた次第  
である。恐らく彼らの輩成る日は、  
彼らの知性、半殺しにあつてゐる。曉  
てもあるう。御時勢柄せいで、御自  
愛の程を祈つておこう。

ポシ中文化

その風光の明媚なるは眞に東洋  
のスイスの名を辱かしめざる所なり  
とほ我々の先輩の自由民権的壯士氣  
取りのたわごとであり、吾々ほこ  
う、乳臭のたわごとによつて祖國を  
有難いものゝ教育されて来た。  
所がどうやらさういうたわごとが  
眞實性を發揮する時代がやつて来た。  
今日、日本にはいたる所、倒錯した  
スイスの登氣場が氾濫してゐる。

いとし簡單なことをから、まホ封  
定的なトスでアンブルの首を切つて  
中にたたえられてゐる白く透明な液  
体化されたジヤン・ジヤン・ルソ  
ウと注射器に吸収する。それを十七  
世紀の戦塵に汚れた腕にさしこむま  
での話だ。忽ち清澄な山氣を感じて  
窓に混迷の頭にアルプスの連峯が翠  
密を謀かせ始める。その零明氣にお  
つて自由の壯翼が羽ばたく。身はた  
とえ汚濁の泥濘にひたされて、心は  
蓮華の清澄さが氣脈を通じて、心は  
満帆に風をばうんで鏡面をシエネー  
ブ湖上を疾走する爽快さだ。  
これほど手軽な自由の獲得はない。  
これほど安価に打建せられる地上の  
極楽苑はない。さういうところから  
アフレのジヤン・シヤ馬にはうつつけ  
の甘露であり、駭戦日本津々浦々  
にまで液体空氣が流行するのし当り

前である。

だが、これらも遺物ながら二十世紀  
の科学の進歩による一種宗教の片鱗で  
あり、阿片の同類であることは相  
違なく、須臾にして消えざる線香花  
火的現象のはたきさば混迷の泥沼か  
より一層混迷の汚相を露骨に倍加し  
て呻吟、懊悩にまで叩き入れられ  
はなならない。

實に自由の理がしからず簡單にとら  
えられはすとて、十七世紀か一  
躍二十世紀にまで飛躍するは了し  
い。アフレケル日本人は二十世紀  
の時間によりなから纏詰された生け  
る屍に似たしい。もろろん纏詰には  
生肉のレンデルかけられていゝか、  
所詮は白人の胃袋や生道器にホルモ  
ンを給する以外、何ものでもない。  
さか、既に死せる首を撲殺すべく如  
何卒の刺客の教習が効をわはさるる

いか...

ともかく十八世紀からやり直し  
わはならぬ。出直した。いたす  
に東土や台湾の醜態に更にアンアル  
の糞尿を積み重ねて見た所でアル  
ス、幻想は実現さるべくも無い。ま  
す、丁度身を發揮して國土を地獄化  
するのみである。吾々はそのうち  
態を脱して、賢明な刺客のメスと  
かわはならぬ。そうならては、は  
や封建的ト又は物に役にも立たぬ。  
日本人の刀剣には皆ゴロツキの性格  
が刺印されていゝか、そんなしは  
アンアル・カクト位は価値を認め  
られぬ。

吾々は十八世紀大明傘をメス  
を創造せねばならぬ。  
今日メ日本文化は十七世紀の遺物  
より、はるくして、便秘患者の  
文化であり、眞の日本文化はこゝに

う木、世文化を抹殺するメスを手自ら  
の如性にも、唐く、とに口か、  
い、平八か武平歌集を世傳に宣言し  
た日世人の教習の大前提をなしては  
なかり、  
「同時不眠醒れよ、痴態を脱せよ」  
か、十八世紀のアルプス連峯に高  
い、  
今日、日本に四実を課題にするのは、

中 新 敬

ごひら、ふ通信  
きやわろ、きやわろ、きやわろ  
ろろろり、  
きやわろ、きやわろ、きやわろ  
ろろろり、  
これに蛙の言葉であり、わか畏敬

する詩人草野心平氏はとりあげられ  
た歌声の一端である。草野氏は蛙語  
の達人で、その詩集には蛙語をも、  
て綴った幾十篇かの詩がたり。詩の  
愛好する博識の士はもちろん、蛙語  
を学ぼうとする奇特の方々はせむと  
し氏の家集をいもどかねばならぬ。  
氏の研究によると、日本語で「幸  
福」といふものはたわいななく、  
「このた」と二十字を昔、おはら  
い内容を「うてえ」ひるしれと  
り「かいく」と十四音で表現でき  
るが、「みんを孤独」と文字でと  
わわれかや、てのける意味を「なみ  
かんた」り入り」と八音使わわはな  
らぬいそである。  
も、とち、どちかが詩的で韻律に  
かた、ているかは、氏はさかみすか  
ら詩人であるからであらう。説明  
を省いてあり、詩というものは人  
てわからず、草野氏の詩も、なを語



のくり返つたりするさまはヒマツ  
しの見物には結構まにまにやうだか  
ら地球の向う側の舞台ではすわら  
ストリッパのハタアライにまで閉  
心を惜しまれたい寛容を讀者は私  
のこゝろ一文に眼を角たなせよこし  
をさるまじい。

青色追放

さて最初に紹介するものは心や田圃  
に属するが、蛙の國の二ガニガ  
王國を震盪させた大事件である。震  
盪なるといふといささか大げさな聞  
えよつが、わが國の朝日や毎日にお  
たる「ニガニガ新報」をばじめ同國  
の全新聞が一週間おわら、一面ト  
ツプ五段抜きでデオデオ報道したの  
でその事件の同國に與えたシヨク  
ム大き、か想像されるならう。以下  
はニガニガ新報三月二十日から二十  
七日までの朝夕刊の抜粋である。

二月十九日二十五時ごろ、ケロツ  
ク放送局でアナウンサーのクワック  
氏が執事連報を終つて放送室を出た  
したん、武裝警官数名に護衛された放  
送局總務部長、ふ氏はふ、か、た  
十時以内の放送局を立退け、ふ、  
ふ氏は籠かに申渡した。クワック氏  
が驚いて「ビウしてですか」とたす  
わたか、武裝警官がピストルを突き  
つけたので、ふ氏は退去した。次  
で案内嬢のケリルさん、ポロテニ  
サアのガリキ氏が「身おまわりの  
お入さし、てすく出る」と放り出さ  
れた。

二十日夕、掃除婦のぐくぐさん、  
機軸係の氏、アナウンサーのやん  
氏が同様理由不明に入すに就き、  
二十一日朝、ポロテニサアがじやう  
氏ら二十八名が出勤して来たこと、局  
の職員入口で立入禁止を食った。  
二十五日、ガリキ氏は数名をふ

置いた。私宅に訪ね、この上りた処  
に、一氏は、吾たはにたふりし自由  
が、あるとすれば、私は、吾たは、自由  
由が、あるとすれば、私は、吾たは、自由

三十四氏は、ニカニガ王國放送分  
組合の幹部として、日々に、算下り、姓  
一夫一婦主義を組合方針の中に導  
入した。この事がある。しかし、この返  
か始、たとき、には、この組合も分裂し、  
一夫一婦主義は、二名しか、三十四  
氏中、約半数は、すでに組合から脱  
退して、いた。

以上を要言した。同國の事情を、  
、知られる。讀者の、たふり、若干の、説  
明、を、たて、た、く、の、が、譯、音、と、して、の、義  
務、を、ら、う、う。

同國で、十六年前に、新たに、ニカニガ  
國憲章を作つて、一夫一婦、を、う、た  
、た、一夫一婦は、兩棲動物界では、理  
想、と、した、た、り、れ、ど、現、実、の、問、題、と、し

て、は、な、か、な、か、め、か、し、い、い、で、と、  
ハ、國、で、し、取、上、げ、な、か、た、の、を、ニカニ  
ガ、國、が、兩、棲、動、物、界、に、さ、き、か、け、て、憲、章  
に、う、て、つ、た、た、か、ら、い、か、に、驚、異、的  
で、あ、た、た、か、は、想、像、で、ま、ら、う、し、ち、ろ

ハ、それ、が、果、して、実、行、て、ま、ら、か、と、う  
か、と、疑、問、が、兩、棲、動、物、界、の、各、國、憲、章  
學、者、が、出、種、々、論、議、さ、れ、た、の、は、い  
う、ま、で、し、い、い、け、れ、ど、し、当、時、ニカニ  
カ、國、で、は、多、夫、多、妻、の、た、め、男、女、關、係、に  
ト、ラ、ブル、が、た、え、ず、さ、ら、に、驚、異、的、な、出  
産、過、度、が、同、様、相、食、の、悲、劇、ま、で、著、起  
した、過、去、と、悔、ニカニガ、國民、を、ま

けて、の、飲、食、へ、の、悲、願、と、して、それ、ま  
で、非、合、法、政、党、で、あ、た、一、夫、一、婦、意、  
の、政、局、を、担、當、さ、せ、た、の、憲、章、を、打、出  
した、の、で、あ、た、

と、こ、ろ、か、六、年、た、つ、と、さ、ら、さ、ら、熱、心  
を、忘、れ、な、か、た、あ、ら、う、こ、と、に、護、衛、を  
男、女、關、係、の、中、に、唯、一、の、生、き、守、護、を  
感、い、て、來、た、老、人、た、ち、の、間、に、及、び、氣、運



次に紹介するものはケロケロ共和国  
の教師であり同時に新進ジャーナリ  
リストとして賣出して来た。さうさう  
の氏の著書「獨白録」よりの板書  
である。氏は極めて「良心的」なと  
いわれ教師でありながらその奉仕  
教えとは反対の立場に立ちると一般に  
信じられていた。其勸主義に同情を示  
し、一時「共働党」入党の用意があつた  
と發表してゴウゴウたる「替香」の嵐  
中に立つた。この嵐は「現在」水が  
き、其の「哲學部門」担当「教番」として、  
活躍してゐる。性格的にけいせつ、  
氣が弱くセシナメニクリストらしい  
思想にとちがふといへば平気でと  
つた。たとふは、たゞその文  
件にはペンミスミスで持情的な  
彼の傾向にマシナシした甘さがある。て  
青年時代にもしてはやさかしく、  
てはなつかしく思ふ。譯者の筆は  
その文書の特徴を十分に移して

たいてはさうかがはれぬあらかじり詩  
香のおゆるしをこゝろおきたい。

「休日」は常にまたたく間に過ぎ  
去る。午後十時の今、橋には廢れた  
妻が寝り、三歳の長男はふと、の政  
小日から綿を引きさきり、一玉に足  
りを、長女は鏡台にク、リ、ム、と、た  
くりながら、むすか、て、い、こ、のよ  
うな環境で、慨然として、私にとう  
して、深遠な思想を生産し、偉大な藝  
術を創造せよというのか。その上、  
私は、ゆるい深遠とか偉大とかいふた  
ものは、あまり性に合はぬといふであ  
らう。

人間界でベスト、セラー、製造販  
賣の業とする、偉文うれる、林詩堂  
がその製造品の一つである。Smith Love  
の「Irony」の中で、氣持のよい仕事部  
屋や自分一人に、なれ、家庭、生活、を  
のものと同様に、親しい友人、野菜料

理のうまいと、アノ作ヲ方を知、て  
い、料理人、エ、書齋、窓の前、の、境  
夏の雨、冬の青空、など、笑しか、マ  
い、ヨ、ア、ク、ナ、ハ、シ、シ、その中  
ハ、ニ、三、を、倒、し、け、け、の、代、リ、に、ま、ま、等  
き、冬、の、青、空、の、代、リ、に、冬、眠、は、氣、持、の  
よ、い、暖、い、土、火、を、お、き、さ、え、す、れ、ば、い、ま  
く、り、その、ま、ま、私、の、欲、し、い、の、ま、ま、  
ソ、ノ、ク、リ、一、致、す、る  
た、か、彼、も、欲、す、る、た、け、で、は、な、く  
所、有、し、え、た、に、違、い、な、い、と、い、う、の  
は、彼、の、他、の、エ、ン、マ、エ、を、説、お、は、そ  
れ、ら、の、一、一、か、す、て、は、彼、の、所、有、と  
し、て、冷、々、に、現、れ、て、く、ら、う、で、あ、る、し  
そ、の、ハ、ら、の、う、ち、の、た、だ、一、つ、だ、い、て、私  
が、所、有、し、た、い、な、ど、と、い、え、ば、氣、遣、い、扱  
い、さ、は、る、た、ら、う、私、は、極、り、て、僅、か、の  
收、入、で、私、を、合、め、て、七、匹、の、生、活、を、支  
え、て、い、る、の、た、か、ら、で、あ、る、  
と、は、い、え、と、も、か、く、定、職、を、し、つ、て  
い、る、こ、と、で、職、業、安、定、所、の、前、で、自、分、の、

番、の、來、る、の、を、待、つ、て、何、時、間、し、ま、ち、つ  
く、ま、人、々、の、前、を、こ、そ、こ、と、通、り、す、ま  
ね、ほ、な、ら、な、か、た、し、自、分、の、所、有、て  
は、な、い、に、し、ら、日、常、家、族、の、使、用、で、ま  
る、四、つ、の、部、屋、が、あ、る、こ、と、で、遠、い、立  
て、を、食、つ、て、い、る、下、宿、住、い、の、友、に、対、し  
て、身、で、ま、い、思、い、を、せ、わ、は、な、ら、な、か、  
た、私、の、若、さ、は、五、十、を、す、ぎ、た、人、に  
憚、ら、わ、は、な、ら、な、い、し、私、の、健、康、は、  
昨、々、神、經、痛、が、顔、面、を、ひ、き、つ、ら、せ、  
不、尻、を、お、す、お、す、さ、せ、る、に、し、ろ、結、核  
が、何、か、で、寂、つ、四、り、の、隣、人、に、対、し、て、は  
へ、り、く、た、ら、わ、は、な、ら、な、い、私、は、一、つ  
の、書、齋、を、欲、し、が、る、ま、り、は、す、べ、て、の  
人、が、せ、り、て、一、つ、の、住、む、部、屋、を、持、つ、こ  
と、を、望、ま、わ、は、な、ら、な、い、で、あ、ら、う、  
私、は、法、義、甚、處、で、は、な、い、け、れ、ど、傷、痕  
帯、た、ち、が、ち、ぎ、れ、た、手、足、を、さ、ら、し、て、金  
を、乞、う、街、角、を、窓、下、に、見、な、か、ら、オ、ム、レ  
ツ、や、ビ、フ、テ、キ、を、食、い、ビ、ル、の、泡、を、な  
め、な、か、ら、大、層、開、道、を、余、欲、て、ま、よ、と、う

そぶく氣にはなれない氣の弱い一人  
の教師、そして雜誌記者である。牧  
師であることも記者であることも  
私には大変つらいことだが、だから  
と、今日、他の何物であること  
とかできようか。  
少年の日の私は音楽家になりたい  
と思ひ、次いで絵描きになりた  
と、四歳年上の私の兄は、その  
ころ何を思つてか、涙を流してとめ  
る父母や祖父の言葉を振り切つて中  
學で中途退學し、ある食料問屋の小  
店員になつていたが、その兄が「音  
樂家や絵描きは金持になければなれ  
ない。無理になつても成功しない  
と止めたのである。それとも志をま  
げようとするなら私に「お父さんの今  
の収入では、二人同時に中學校には  
入れない。お前はお父さんのあとを  
ついで牧師にならなければいけ  
ない。そのためにはどうしても學校を出な

くてはなうまいから、ぼくが中學校  
をやめたのだ」私はぎやうんと怒り、  
それ以来、音楽と絵画は私の世界の  
外へ放り出してしまつた。  
私はまた古典學者にならうと思つ  
たこともある。終日、大學の書庫に  
こもり蛇皮經や蛙鳴集、龜毛史のた  
ぐいをよさき、青白い顔をしてこと  
に鬼才り、ぶろつ、おのエッセ子を愛  
したか、戦争は影のよりにやせしけ  
た私にし我衣をまとわせた。八年後  
に頭をカラにして帰つた私には、荒  
廢した教会と栄養失調の家族が待  
ていた。  
職業について、之は、圖書館員と  
いうものが私には最も魅力があつた。  
けれどもこのころのようには圖書館ま  
でかううとスピーカーをつけて走り  
出すのにはもう私の望みからは遠く  
哲大を軍隊を持つアリの國は私は  
好きではなけれど、私し晴人し

その時人し、週に五日、日に四時間  
働いて、五とは氣に入らな本を讀み、  
散步し、友を訪ね、映画を見、音楽  
を聞き、餘之なりのが共働社会であ  
るとすれば、私は共働社会は好きで  
ある、その人を社会が十年級に必ずや  
つて來るとして、そのためにには重  
労働でし喜んで受けたらう。  
私の友人はみな私と似た考えをも  
つてゐる。恐らくは、友人の友人た  
らし、またその友人たらし、同じよう  
な考えをしつてゐるに違ひない。一  
匹づつ四り離せば、私を聰明な者が、  
集團となるとうとうして、こゝろ悪かし  
くなく、で競争などをたくらみ始め  
たりするのたらう。  
十二時、ようやく子供たちも寝入  
つた、雨が降り出す。涼風が膝まで  
やがて來ふ。ああ幸福とは、こゝろよ  
うなことを指すのであらうか。それか  
や、て来たと思つたらその時には次

の日のいとをみにそまえて眠るをけ  
ればならぬ。  
西から東へ、南から北へ、ただ  
ニサホリージの不在證明を修めた  
わの一日。私は昨日一日を憎悪す  
る。一日の半に流れた空しい朝の生  
命を輕蔑する。  
たか、例えは今日會つたか、か  
文化研究所のろろろ助教授のきやわ  
ろ國年代記へ彼は毎日その年代記と  
數巻ずつ讀んでゐるにしてみ、そ  
のしつた、た、た、た、た、た、た、  
はり、サホリージの不在證明、で  
はなつたらうか、た、た、た、た、た、  
明書の遺りは、彼のはそれを彼か進  
んで遣んだものであり、私は、  
をえす遣んだものであり、た、た、  
日作をたれば一日食せられ、の歳言  
がすこぶる平寂であること、た、  
た、た、不在證明、た、た、た、

うか、現在、心にもない仕事をして  
いる人は少くなく、物きたくとも職  
のない人は更に多い。心にもない仕  
事に従うものは好きな仕事とするも  
のの十倍疲れ、物きたくとも職のな  
いものは更に百倍疲れる。一日作さ  
ざる者には子日食わしめよ。

何れかもし知りつくしたラフアウス  
ト博士のよりに生きていくのが嫌に  
なるとしたら、何れ知らぬのしい  
いっししれない。けれど、フアウ  
スト博士が傳説であるように、知り  
つくすといふことも傳説にすぎない。  
すべてを信じるものはすべてを疑  
うに同じ。という論理。だから私は  
信じ切りしせず疑い切りしなさい。  
という論理。結局は、傍看者でいま  
いるかという論理である。傍看者で

長生きするためにどうしても必要  
だというなら、私は、醜惡で恥に満  
ちた老字をもしりぞけようとは思  
わない。私の目と耳と手が残って  
る限り、私は見、聞き、そして記す  
だろう。私の記すものはかたかく  
また、たちまち死になす運命にある  
として、見、聞き、記す、という  
私の業（カルマ）は残るであらう。  
私は、私の負、た業と、私が作るマ  
ルクカルマを信ずる。醜いことと美  
しいことと同様、存在、するといふ  
ことは注目すべきではないか。  
私の業よ、流轉せよ。

ナルシスは己の姿に恋して水に溺  
れた。彼は完璧に美しかつた。その  
死は悲劇とは言い得まい。  
われわれはナルシスの美観し持た  
ないのに、なお水に溺れようとする。

われわれは鏡にうつる己の姿から顧  
みし、とらたけしか見ようとしない。  
それだけではない。己の頼みに  
着いて己の姿を修正させやるのであ  
る。私のみによく欲望し、私々の  
水鏡に寫すとき、鏡のかけと、色彩  
と、揺れと波とによつて、いつの間  
にか美しいナルシスに化している。  
私はそれかまこつと私の姿でない  
ことを知りながら、虚しいナルシス  
を己の姿と思ひ込む。私は私を、  
忘れようとつとめる。私は私を、  
私のかげと違つて水に落ちこむ。そ  
して、しばらくたつと浮き上る！  
これは一体、善劇なのか、悲劇な  
のか。

原 田 憲 雄

白玉樓中の人

原田憲雄

一李長吉をめぐって

一 請説軒轅在時事

請説軒轅在時事

伶倫採竹二十四

伶倫採之自崑邱

軒轅詔遣中分作十二

伶倫以之正音律

軒轅以之調元氣

當時黃帝上天時

二十三管咸相隨

唯留一管人聞吹

いさ説かん軒轅か在りし時トキの事

伶倫は竹を採んぬ（その數）二十四

伶倫かこれみこしを採りしは崑邱よりし

軒轅か詔して中なかにに分ち十二とせしむ

伶倫はこれをもて音律を正し

軒轅はこれをもて元氣を調えき

當時 黃帝天に上りし時

二十三管 咸みな相あひ隨いき

唯だ一管を留めて人の間に吹く

無徳不能得此管

徳をければこの管を得る能わす

此管沈埋虞舜祠

この管は沈埋れはてぬ虞舜の祠に

(若篁調嘯引 Ⅲ・175)

中唐の詩人李長吉のこの詩、「さて申そう」(請説)とシカツメらしい面付けして見せし。太郎冠者の俳諧歌たほべきと、はじめから調嘯引だと斷つてある。とはいえ、軒轅どのが領せられたる時世のこといや(軒轅在時事)と途方もない大時代を持ち出したからにはタタでは濟ひまい。ゆらい太郎冠者は曲者と相場がきまつてゐるようである。ところて軒轅とは何者か。黃帝である。「黃帝は少暎の子、姓は公孫、名を軒轅といふ。生れなからにして神靈、弱きより能く言ひ、幼くして徇齊、長じて敦敏、成りて聰明なり。軒轅の時」史記卷一、五帝本紀第一の冒頭である。司馬遷が中夏の歴史に筆を下して、さてもと説き始めたのが外ならぬ黃帝としてみれば、また軒轅をかつぎ出した長吉の魂膽は、天下第一等の史家と氣取らうというにあつたのか。魂膽はともかく問題は「軒轅在時事」で

ある。大史の事もまたそこり及びうとしてゐる。しばらく長吉はついで  
史記に聴こう。

軒轅の時、神農氏の世衰え、相侯相い侵伐し、百姓を暴虐せしに、  
神農氏は征する能わぶりき。ここにおいて軒轅はすなわち干戈を習用  
し、もつて一民を一享わさるものを征しぬ。諸侯咸を賓從せり。しか  
るに豈尤は最も暴をなし、よく伐つしめぬし。炎帝諸侯を侵陵せんと  
欲す。諸侯咸く軒轅に歸す。軒轅すなわち徳を脩め、兵を振え、五氣  
を治め、五種を蒸え、萬民を撫て、四方を度り、熊羆貔貅貙虎を教え  
し、て炎帝と戦いき。三たひ戦いて後その志を得たり。豈尤亂をそし、  
帝の命を用いず。ここにみいて黃帝すなわち師を諸侯に徴し、豈尤と  
涿鹿の野に戦い、遂に豈尤を禽殺せり。諸侯咸く軒轅を尊びて天子と  
なす。神農氏に代りぬ。これを黃帝とす。天下にして順わざるもの  
あれば、黃帝從いてこれを征し、平くればこれを去る。山を岐き、道  
を通じ、いまたかつて寧らかに居ることなかりき。(略)萬國和しぬ。

鬼神山川封禪與して多しとなす。寶鼎を獲、日を迎え、災を推し、風  
后、力牧、常先、大鴻を擧げ、して民を治めしむ。天地の紀、幽明  
の占、死生の説、存亡の難に順い、時に百穀草木を播き、鳥獸蟲蛾を  
淳化し、日月、星、辰、水波、土、石、金、玉を旁羅し、心カ耳目  
を勞勤し、水火材物を節用し、土徳の瑞あり、故に黃帝と號しき。

(史記 卷一)

まことに堂々として、後に四億を盛るべき國土の尊劍にふさわしい物語  
である。ただしこれをそのまま引き寫したのでは俳諧とはならぬ。敢て調  
嘯引と名乗ったからには、定めて別の予細かなければならぬ。

伶倫は竹を採らぬ(その數)二十四

伶倫がこれを採りしは崑邱よりす

果してもち出されたのは竹であつた。伶倫とはいかなる人か。黃帝の臣  
である。呂氏春秋の古樂にいう。「むかし黃帝伶倫をして律を作為せしめき。  
伶倫は太夏、西より、すなわち阮陰の陰にゆき、竹を嶰谿の谷に取り、空

竅厚鈞を生ぜるものをもつて兩節の間を斷てり。その長さ三寸九分。しかしてこれを吹きもつて黃鐘の宮をなせり。吹きていわく、舍少なりと。次に十二筒を制し。もつて阮險の下にゆき。鳳皇の鳴を聴き。もつて十二律を別つ。その雄鳴を六となし。雌鳴もまた六。もつて黃鐘の宮に比して適合せり。黃鐘の宮。みなもつてこれを生ずべし。故にいわく、黃鐘の宮は律呂の本なりとい。そこで早速

軒轅は詔して中分して十二となさしめ

伶倫はこれをもつて音律を正し

軒轅はこれをもつて元氣を調えき

これでは單なるレアリズム。いな、糞レアリズムにすぎないでばないか、かといふ、前に違はう、

當時黃帝天に上りし時

二十三管成を相隨いき

それから

唯だ一管を留めて人の間に吹く

それから……いや待て

徳無ければ此の管を得る能わす

此の管は沈埋す虞舜の祠に

とうとうしまいまで来てしまつた。長吉集に批矣を加えた清の黎二樵は「これ全く長吉に似ずして、一字も雕せず、一句も琢せず、字句の間、自然にして圓老。然れどし集中に只だ一首のみ。豊筵に嘉蔬を得るに似たり」と評した。嘉蔬たるゆえんは豊筵を展べざる前に説くべくもないが、自然圓老は一首讀後の印象としてまさしく動かしがたい。ただ俳調の詩歌はもと字々句々にヒネリをくれて雕し琢すべき筋合いを「雕せず琢せず」とは一体どうした行き違いか。例の臍曲りが奇を衒つた拗ねわざか、あるいは雕琢の化物あつかいの長吉が平生作との對照をネラつた邊遠きどりか。それもあろうか、高處に立って大觀すれば太郎冠者らしいヒネリが十二分に施してあることが看取られる。「二十三管成相隨」以降かされた。黃帝上天は

ともかく、二十三管か随ったとか、たゞ一管のみ人の世に留つて虞舜の祠の  
に沈埋したとの話はたれが傳へた消息でないようである。「雜うるに虚  
無荒誕の詞をまつてした」と註家王琦がいつたのはまさしくこのあたり  
ことなのであらう。虚無荒誕は史家のとらざるところ、すなわち知了。長  
吉の魂膽、太史公の後塵を拜するにあらざること。虚無荒誕は士君子の  
とらざるところ、すなわち長吉の晋紳に容れられざるゆえんである。ただ  
し荒誕の始まるあたりからこの詩はぐんと光つて来る。二十三管に去られ  
て、ひとり人間の世に聴くものもなく吹きすさぶ苦篁の聲は、すでに寂寥  
の響を帯び、結局に至つて廓然として塵世と隔つた趣きさえ呈しているて  
はないか。

呻吟調嘯は意伸びざるによつて發する。發してかく寂寥なるはせと違ふ  
がためである。王琦はこれを「想うに當時新聲藝い作り、上下の人皆これ  
を習聞し、焉を弱好し、古律の日に亡ひに冷むに任せて正す能わす。長吉  
は身協律郎なり。律呂を掌和するの職あり。その聲を目撃し、これを正さ

んと思欲して此の詩を作りしか」と註した。この推測は鋭いが、なお矢は  
的の下邊を摩して地にふらたやに見うけられる。何となら、後にものべる  
ように長吉は奉禮郎の職を得たことはあつてもこれは協律郎とただちに結  
ひつけるにはなお疑ひの存するものであるからだ。さうに、詩中に首律の  
ことかあるからというのでこれあるかなと飛ひつくことはそれこそ批評の  
糞シアリスム。折角調嘯引と名乗った曲者を遇する道ではないからである。

「歌詩の發寤する所以、其の旨甚だ遠し。それ物情暢樂怨抑の感、吁き  
てこれを大空に散じ、還つて風雲に會し、水土に降り、聲を陶埴の器に包  
む。髣髴の變、盡く樂に搖ぎ、樂の感するところ、激すればすなわち音に  
占われ、章かせばすなわち詞に見わす。音に微なる者は聖人これを察し、  
詞に章わする者は賢人これを畏る。」長吉の友の沈亞之が「李膠秀才を送る  
詩の序」中の語である。聖人が察し、賢人が畏れるのは、詩歌音楽が天意  
と民意と共に反映する鏡であり、ことばの西方めくのを嫌わぬいなら、民  
の頼いを天に放つ祈り、天のこころを民に指さす啓示であるからで、され

はこそ樂記にいわゆる「聲音の道は政と通ず」るのであらう。黄帝が一管の管籥を人間に留めたのは天と地との通い路としてあった。その通い路の衛士であり道先案内であつた詩人が豫言者の性格を帯びるのはいうまでもない。中華にふいては豫言者の性格所有者はその生涯の目的を經世にふく傳統がある。われわれは孔子にその典型を見ることがあらう。經世における成否は問うところではない。いな、その豫言者の性格は世に容れられないであらう。それゆゑ詩人たるを得ないのである。孔子の詩人たること論語を一讀すれば明らかである。世のすべての詩人が、だからあらゆる詩作の瞬間にも孔子の如き經世の念に燃えたといふのはない。むしろ彼らの胸中には雑多な想念かうすまひてゐるにすぎないであらう。ただ、彼らがそのさまさまの想念を言語という爐中に投じ、詩の突が高熱を發してこれを焼きつくすとき、火中から新たに生れた作品には聖人がこれを奪せざるを得ず賢人が畏れざるを得ない要素を具備するのであり、またこの種の作品を生むような眞の詩人はしばしば孔子的自覺に立させられるを得ない。

のである。

苦篁調嘯引は長吉が豫言者たるの自覺に立たざるをえなくなつたがため  
の作品である。詩人長吉に律呂を正す思ひのなからうはずはない。ただそ  
こに止まるものではないのである。敢て虚無荒誕の詞を結構して調嘯せざ  
るを得なかつたのは、察し畏るべき聖人賢人のその位になく、豫言者は政  
治の場から遮断され、經世の志もまたいたすらに沈埋せざるを得なかつた。  
「詩人の運命」を歌つたのである。中華の文明の創始者黃帝すてになく、  
黃帝の道を傳える苦篁もまたかえりみられぬ現世への悲歌である。

長吉の詩に「騷の苗裔」の目がある。騷とはいうまでもなく楚の大夫屈  
原の離騷である。もと中華の詩には正と變との別がある。何を正とし變と  
するかは評家によつて異り必しも一定しないが、大抵つばにいえば、正  
とは肯定的なもの、従つて頌歌であり、變とは否定的なもの、従つて諷刺  
悲歌の趣きを著しくするものである。野に放たれた楚の大夫は「望皇の赫  
戲に陟り、忽ち夫の舊郷を臨眺すれば、僕夫は悲しみ余が馬懐う、蟋蟀と

して顧みて行かず」と悲歌した。その變をよこと明らかである。世に徳無  
きをもつて虞舜の祠に踏埋する苦望と歌う長吉の詩の「騷の苗裔」たるこ  
と、けたし故をしとよを望む

辛 二十心巳村

「白玉樓中の人」と初めに掲げたのは他でもない。この語を通じて私は  
李賀の名を識ったからである。芥川龍之介の死を悼む文章中においてあ  
つたことは紛れもない。ただ、その筆首は菊池寛だつたと、つい近ごろま  
まで思いこんでいた。ところが、龍之介の靈前で平辭を讀んだのは泉鏡花  
であり、かつ文中に「白玉樓中の人」の語はなかつた。管見では菊池の文  
集にも該當する文字を知らない。この記憶の誤りを訂さうとして私は架蔵  
の書を調べてみることにした。戦時の疎開等で半はを失つた後になおす  
ねるものの存するや否やについて多くの期待はかけなかつたが、幸い頼原  
進蔵著『改訂増補蕪村全集』の自序中に次の一節を見出した。

いしかし八年といへば決して短い月日ではなからず。本書に序文を寄せられた芥川氏もすてに白玉樓中の人となつて居る。

この書は昭和八年(一九三三)刊行で私が入手したのはその翌年か翌々年であつた。當時かなり精讀していたからこの語についてし辭書を檢する手間は惜しくないはずである。こころみにそのころ用いた簡野道明著『字源』を引いてみた。

文人の死するにいふ。書言故事「唐李賀將死、有緋衣駕赤虬召賀、緋衣曰帝成白玉樓、立召爲記、天上差樂、不苦也」

また同氏の『故事成語大辭典』には次の説明が見える。

圓機活法に「李長吉將ニ卒セントス、夢ニ人ノ一版書ヲ持スルヲ見ル、曰ク、天上ノ白玉樓成ル、君ヲ召シテ記ヲ爲ラシムト、シバラクアリテ氣絶ス」この事、書言故事にも見ゆ、長吉は唐の李賀の字。

こゝまで來ると模糊たる記憶はにわかには明らくなる。天帝に愛せられて白玉樓中の人となつた長吉は私をとらえ、ただちにその作品を求めしめた。

のである。

最初に入手した長吉集は上下二冊の寫本で、私はこれを京都北野天満宮の縁日に露店の紙魚に食い荒らされた和本の山から得た。長吉の名を識つてより約一年後のことである。その間、師長に問ひ、「唐詩選」三體詩

『和漢朗詠集』等、唐人の詩文を収めた集で當時の私の見うるかぎりのものは當つて見たか李賀の名すら見出しえなかつたから、この兩冊を得た喜びは湯した鹿か泉を見るにひとしかつたに違ひない。

たが、これを手にしてたちまちにして覺つたのは長吉の詩が私には到底齒の立つしろしめではないということであつた。明の批評家胡震亨が杜甫、李商隱、王建とならへて「註」なかるべからざる詩の一つに擧げた長吉詩である。理解の遮斷は言葉と生活感情と思考形式とを同じくする中華に於いてすべしに始まっている。いくらか早熟であつたとはいへ時空に甚しい隔たりのあり、昭和の日本の中學生にたやすく味解されようわけがない。この事情も、しかし、後にわかつたことで、當時の私にしてふれば、かゝる見

た長吉と語りえないもどかしさを、悉く自らの幼さのせいにして苦しくたしめてある。

その後、日夏耿之介、佐藤春夫両氏に断片的な紹介、翻譯があり、ややまとまったものとして橋本循氏の論文、さらに全詩にわたって一應は譯註を施した漆山又四郎氏の『譯註李長吉詩集』のあることを知った。これら先進の努力はいすれも貴重すべきには違いないが、なほ私を満足させるには至らない。大學では附屬圖書館のみかけてやや系統たてて資料を蒐集整理することかたき、長吉に關する私の知識もいくらか進んだようであった。

昭和十六年十一月、日華事變はその最悪の段階に達していた。太平洋戦争の火蓋が切られる直前の重苦しい空氣が時世にうとい學生の上にし覆いかぶさり、私は『李長吉歌詩篇』をひるかえしなからしげしは絶望に陥った。

「絶望のうちには生の絶對否定が現れた如く、絶望より生ずる自己放棄には生の絶對肯定に至らられた面影がある。」西谷啓治著『根源的主體性の哲學』のこの一節は、當時の絶望が私の生に對して占める位置をたくみに言い當

ていたようである。

長安有男子

二十心已朽

楞伽堆案前

楚辭繫肘後

人生有窮拙

日暮聊飲酒

祇今道已塞

何必須白首

長安に男子あり

二十にして心已に朽ちたり

楞伽案前に堆だかく

楚辭肘後に繫かれり

人生に窮拙あり

日暮聊が酒を飲みぬ

祇今道は己に塞かれり

何ぞ必ずしも白首を須らんや

(疎高に贈るヨク)

苦痛のなかへ生への希望を擲ち、アンニユイのなかへ「根源的主體性の哲學」を手にした私は、再び生の絶對肯定の至められた面影を遠つて、絶望の詩人李長吉に還るのである。

南山何其悲

南山何ぞさは悲しく

鬼雨瀧空草

鬼雨の空草に瀧くや

(感詠より)

もはや 長吉の詩を學ぶというよりは、自らの亂れた感情を長吉の詩に移入し、その絶望を彼の詩によつて正當化せうとしていたにすぎない。その年の十二月繰上げ卒業し翌十七年二月から四年の軍隊生活、二十一年三月復員歸郷した私を迎えたのは荒涼たる敗戦の日本と、そこに榮養失調でくるしむ家族であつたこというまでもない。さきごろ病を得て入院し、こゝではじめてやや自らを顧みず暇を持つた。病は癒えるに至らなかつたが、一ヶ月の後に退院した私に再び長吉が歸つて來た。

私の長吉への關心は全く好奇心に發してゐた。この關心を持續させたのは主としてその人を近付けたい難解であつた。今日の私はしばや少年の如く奇を好む者ではない。解きかたきを解くだけの一事に執着すゝほど暇を持つ者でもなく、病弱の身はまたその意志をも消磨してしまつた。しかもなみ私が李長吉にかかわることをやめたいのは何故か。

詩は中夏文學の根幹である。その中には李白や杜甫の如き英雄もあれば  
無数のマイナア・ポエツもいる。陶淵明のように正宗として尚ほれる者の  
あるかたわらには長吉のように恠僻として斥けられるものも少くない。わ  
か國に於ける從來の中夏文學研究は英雄や正宗を概観するに急ぐ傍流やマ  
イナア・ポエツをかえりみる暇を持たなかつたようである。しかも研究の  
方法は傳承的餘習を脱し切らず、たとへばテキスト校訂の如き基礎的作業  
すらほとんど行われていなかつた。これでは一國の文學の大觀をうかがうに  
も足るまい。さうに今日に於いては、かつて地方文學としての中夏文學の  
傳統が見すべからぬものにも世界文學の場から再検討を要請されよう。討究の  
結果、かつてはマイナア・ポエツの一語に葬り去られたものも當時の正宗  
と位置を顛頭すべきこと、T・S・エリオットによって見直された英國の  
ノタフィシナル・ポエツの如きものと、たれか斷言しうるであらうか。

以上のような説はいかにも堂々として充ちうしく、こゝらで大急ぎ口を  
拭つておけばひととおりの一家言の體裁は整うことになるのであらうが、そ

れば私の趣味に合わない。とすれば、堂々たる説を裏付けるべく作業開始の段取りとなるわけだが、貧乏と病氣にはさまれて悪くすれば首くくる仕儀となりかねない私が、なせそのような柄にもない學者のまねごとにあたらう命を磨りへうかねばならないか。おもうにそうした大事業はこれを果すべく専門の機關があり、機關を動かすべき學者がある。門外の私どもは謹んでこれらの人に教えを乞えはいいわけである。私の長吉へのかかりあひも私を越えて専門家の領域を犯すを目的に始まつたのではない。李長吉の詩が私にとって甘美さわまりない果實であり、みずからの齒がかみあつたこの果實をさうにわが舌で味わひ確めてみようとしたまでである。ただこの果實は後人が「不可不注」と銘打つた詭論の固い殻をまといつてゐる。こゝろを破るには時として學者先生が秘藏されるところの各種のハムマアを必要とすであらう。しかしそのハムマアがいつ象牙の塔からおとりに出て、この殻を見出すかは未定であり、私の舌がそれを待つだけ氣長でなるとすれば、とりあえず覺束ないわが齒をかうもハムマアの代用としない

おけにはゆくまい。立ててみて耐え得ず。ホロホロと齒がかけ落あるとす  
ればわが身の不運。見ると見かねて學者先生の腰が上り。見ん事この殻を  
お割り下さる段取りとしなれば。これほもう昭代文運陸昌の餘慶。生ける  
しるしのあつたことを欣喜せねばなるまい。

三 莫忘作歌人姓李

「昌谷詩解の序」を書いた王思任は「窮すれば必ず變に至る」と記した。  
しかしらは長吉をして變に至らしめた「窮」とは何か。これを説くにはあら  
かじめ長吉の身上について略述しておくのが便宜であろう。詳述するの  
更に便宜であることはいうまでもない。が何しろ千年以前のこと、それ  
窮乏のうちには天逝した一詩人の身上である。材料といつては残した作品二  
百數十首。同時代人が書きとめた記事少々。それにもとづいて後人のな  
した研究數篇があるのみで、それすらもことごとくは見ることにも能わす  
とに中夏の土に至り難いこと千年の昔をしのぐ日本に細き命を崇む私には

残念ながら略述しておくより手はるいのである。

李賀。李は姓、賀は名、長吉はその字あざなすなわち他人から呼ぶべき名である。長吉は「金銅仙人 漢を辭する歌」の序に自ら「唐の王孫の李長吉」といひ、長吉と同時代の詩人杜牧も「李長吉歌詩の叙」に「賀は唐皇の諸孫」といつているので、その唐の帝室につながる貴族たることは疑いなく、さらには宋代に撰ばれた唐の歴史の書『舊唐書』に「李賀は……宗室鄭王の後」といひ、『新唐書』に「系は鄭王の後に出たり」といひ、唐人の軼事を集めた『太平廣記』に「唐の鄭王の孫」といつている。唐の代に、鄭王に二者あつて、鄭孝王亮がその一、いま一人は鄭王元懿である。亮は高祖の従父、隋の海州の刺史で武徳ごうていの初め鄭王に封せられ、『宗室世系表』の中では「大鄭王房」とよばれている。元懿は高祖の第十三子で貞觀十年の改めて鄭王に封せられた。『新唐書』では「新惠」といつているのは元懿のなくり名が「惠」だからである。元懿の子孫を「小鄭王の後」または「惠鄭王の後」といつるのは鄭王亮の子孫と區別する

ためであつた。「長吉別傳併註」に注「を書いた田北湖は『唐書』などにい  
う「鄭王」は「大鄭王」だとし、従つて長吉は大鄭王の子孫だといふが、  
理由は記さない。「李長吉評傳」の著者王禮錫は田氏と同斷で「漢書」と  
いえは「前漢書」を指す如きものと説き、朱自清もまたその「李賀年譜  
で王説に賛成してゐる。これに對し「小鄭王の後」説を立てる閻崇璩の  
「李長吉年譜」があるが、朱自清はその取り難いことをのべている（朱氏  
「李賀年譜」）。

鄭王の後、長吉の父李晉肅に至る約百年間の世系は明らかではない。晉  
肅は「邊上從事」すなわち邊境の地に勤務する役人であつたと「太平廣記  
に記してゐるが、後にのべる「諱事件」で長吉をははむ者がその名を利用  
したほかにはほとんど聞えずところのない人である。ただこの人が大曆三  
年（768）秋、洞庭湖西北の公安で杜甫に會つてゐることは注目すべき事實で  
あらう。

杜甫は大曆元年五十五歳の春、雲安から夔州に移り、ここに約三年寓居

したか、三年三月、峡中を出て江陵に向った。江陵は後の湖北荊州府である。秋、さらに江陵を去り、その正南の公安に移る。途次の作に「居を公安山館に移す」の一首がある。

南國晝多霧

南國は晝も霧多く

北風天正寒

北風をきて天正に寒し

路危行木杪

路は危しくして木杪を行き

身遠宿雲端

身は遠く雲の端に行く

山鬼吹燈滅

山の鬼は燈を吹いて滅え

厨人語夜闌

厨人の夜の闌けたるを語れる

雞鳴問前館

雞鳴に前館を訪う

世亂敢求安

世亂れて敢て安きを求めんや

公安は蜀の劉備が襄陽で敗れ南に奔り、吳大帝に推されて左將軍となつて居た城である。ここには杜甫を迎える人もないではなかつたが、なほ長く滞留すべき地ではなかつたことは「久客」と題する詩に

羈旅にありて交わりの態を知り

淹留見俗情

羈旅にありて交わりの態を知り  
淹<sup>い</sup>しく留<sup>り</sup>て俗情<sup>を</sup>見<sup>る</sup>

とうたつていろので知られる。秋の終ころには公安を去つて沔鄂に東下し  
ようとしていた。丁度そのとき公安を過つたのが晋肅であつた。寒風すさ  
ふ江頭に長く相別れようとする兩者の感慨はいかなるものであつたらうか。  
杜甫に「公安にて李二十九弟晋肅の蜀に入るを送り、余は沔鄂に下る」の  
詩がある。

正解紫桑纜

正に紫桑に纜を解かんとして

仍看蜀道行

仍<sup>ま</sup>ち蜀道<sup>を</sup>行<sup>く</sup>に看<sup>み</sup>ぬ

檣鳥相背發

檣鳥は相背きて發し

塞雁一行鳴

塞雁の一行<sup>が</sup>あ<sup>り</sup>て鳴<sup>け</sup>り

南紀連銅柱

南紀は銅柱に連<sup>り</sup>

西江接錦城

西江は錦城に接<sup>す</sup>

憑將百錢ト

憑<sup>り</sup>て百錢<sup>を</sup>將<sup>つ</sup>てト<sup>し</sup>

漂泊問君平

漂泊を君平に問ふ

尋陽郡南楚城驛すなわちいま杜甫が旅立とうとするほとりを漢代には柴桑と稱したのである。檣鳥はマストの標識である。東行する甫の船と西行する晋甯のそれとは相背いてみたとを離れる。用の向う南紀（江漢）はそのまま南のはてなる地に立つ銅柱につらなり。晋甯の向う西江は錦城（成都）に接している。一たび別れては、もはや相逢うことも期し難い。よめて成都についたならば、日に百錢を得るため賣卜する巖君平先生に心づくまでわれらが漂泊の身の運命をたずねてもらいたい。というのである。中華の詩は初めに漢の故事を用いたならば終りまで同じ時代の故事で貫ぬくならいてあって、銅柱も君平の百錢の卜もともに採桑に縁つて引出された漢代の故事である。すなわち、後漢の馬援が交祉に至り今の廣東省分茅嶺の地に漢の極東の標としたのが銅柱であり、君平もまたその時代の野賢である。この賢者の名はしほしは詩文にあらわれた。その詩文が吟めく人の手になつたものである。いことは言をまたぬ。けたし身とよろこむのうちによく

ものはかえりよること少く、まゝして人に問うことは稀であらう。當時、杜甫は五十七歳、死に先立つこと二年、晋肅はなお二十歳代であつたかと推される。感軫不遇の勉年になお漂泊定めない詩人の悲痛はいうまでもない。私には、これに答へたであらう晋肅の心情を知ろうと欲すること切なるものがある。惜しむらくは今それを得んすべはない。

甫の詩の題に晋肅を「二十九弟」とよんでいることから見れば兩者の間には血縁の繋がるものがある、たことは明らかであらう。

杜預

杜審言 | 杜閑

李昞 | 高祖 | 太宗 | 紀王慎 | 義陽王恂 | 李氏

X | 杜甫

舒王元名 | 舒王亶 | 李氏

崔某 X | 崔某

小鄭王元懿

大鄭王亮

李晋肅 | 李賀

吉川幸次郎博士の『杜甫私記』中の杜甫家系に、鈴木虎雄博士の譯註の

『杜少陵詩集』(續國譯漢文大成)のそれを參考し、これに李賀の家系を配すると右の如くなる。この圖ではしほらく田氏らの説に據り晉蕭を大鄭王の下に系出したが、甫の詩を玩味すれば、甫と晉蕭の續柄は右の圖に示されたよりし、さらに近付けらるべきかと疑われる。閻氏の「小鄭王の後」説を一概に放棄するあたわぬ事情がこゝに生ずるわけである。ただし、鄭王以降晉蕭に至る閻の世系は不明である。この間に杜甫の母系にあたる李氏と長吉の父系の李氏との間にさらに密接な關係が結ばれたことは想像されないことでは無い、といふのは吉川氏が『杜甫私記』中で詳しく考證して大られるように、甫の家は父系母系ともに純粹に華北の系統で、ことに甫の曾祖父の杜依墓が河南の鞏縣の令となつて以來その家はすつとそこに任ぬ。甫もまたそこで生れたと推せられ、その地は河南省の東方五十マイルに位し、黄河の南岸に臨む。これに對し長吉の祖たる大鄭王についていへば田氏によれば、その子孫は「多く東都に留つた」といふ。東都はいうまでもなく洛陽である。また後にのべるように長吉が家居したのは洛陽の西南

約三十マイルの洛水をはさんだ部落畎谷だといふ。さすれば杜甫の家と李長吉の家との距りは百マイルと云ふ。しかも同じく李と姓とする家と通じて二重に唐の皇室とつながる杜甫の家系と同じく唐の皇室につながり李賀の家とは極めて結びつき易い関係にあるといつてさしつかえはないであらう。兩者のこゝろの家系上の関係はまた二人の作品の上にも或る關係を想像させるよすかとなすかそれは後に考えよう。左の「太平廣記」には五代の王定保の「撫言」を引いて「父は璿肅」といつているが「璿」は明らかにお晋のあやまりである。

母は鄭氏でその子を念うこと深かつた。「太平廣記」に見え、その長吉に對する愛は数々のエピソードを生んでゐるが後に更に觸れよう。王氏は嫁した姉のあつたことが李商隱の「李長吉小傳」に見え、弟のあつたことは長吉の詩「歸ウし夢に廻す」「弟に示す」「勉愛行し小季の廬山に之」と送る「弟」によつて知られる。徐渭・董思萊註「唐李長吉詩集」には「弟に示す」詩の題の「弟」の下に「猶」の字があるのでこれを弟の名だとする

説があるが、この字は他の刊本のいずれにもないので疑わしい。

このほか「二兄」「正字十二兄」「十四兄」などの族兄があり、長吉はそれ  
れ「奉和ニ兄罷使遣馬歸延州」「秋涼詩寄正字十二兄」「潞州張大宅為酒遇  
江使寄上十四兄」の詩と贈、ている。

また長吉に妻や子のあったことを詩中の「卿卿」「飢兒」などの字句と証  
憑として説く者もある。中華の風俗から考えて長吉がいかにも文遊したから  
といえ全く妻とよとることゝなかつたとは考へかたい。か、杜牧の書いた  
「李長吉歌詩叙」に「家室子養なし」とあるよりみれば早くに離別していた  
のであろうか。

#### 四 昌谷五月稲

長吉の生地かどこであるかは明らかではない。杜牧の「李長吉歌詩叙」  
も、李商隱の「李長吉小傳」もともにこの點には觸れていないからである。

長吉の詩には「隴西の長吉 權輿の客」(酒罷めて、後大徹、詩を贈らん  
こゝを索む、時に流初めて路幕に訪ふり)また目うを指して「刺従せり成  
説の人」(昌谷の詩)の句が見える。そこで彼を隴西の人と見よ者、は少くな  
い。曰「太平廣記」に「隴西の李賀」といひ、宋の吳正子が「昌谷の詩」の  
註で「賀は隴西成紀の人なり」とし、長吉集の刊本に撰者名を「隴西 李  
賀」と記すものも少くないのがその類である。隴西は現在の甘肅省、成紀  
は同省の秦安縣である。

次に同じく長吉集に類出するよりして、彼と「昌谷」の人と見よ者があ  
る。長吉集はつとに「昌谷集」とよばれた。王琦は「李長吉歌詩彙解」序  
に次の如く入る。「唐末兩史の「藝文志」及び鄭氏の「通志略」に  
ない。曰「李賀集」は後人その名を指すことと欲せず、その居りし地に  
依りてしてこれに名づけ、題を改めて「昌谷」といひ、文中「鄭氏とい  
うのは家の鄭姓である。ちやみに宋いと曾考約の家集は「昌谷集」と名づ  
けられたるか長吉とは關わらない。ただし、この昌谷もまた「居るところの

春の名」なることは『四庫全書簡明目錄』に見えり。

さて、王琦は右のようにならば、後、さらに進んでいう。

按ずるに、昌谷は洛陽に在り。地誌は多く載すを失く。詩中の原註に「昌谷と女九山と嶺坂相承く。山は即ち蘭香神女が上昇せし處。その谷の東に隋の福昌宮あり」と。按ずるに、その地は隋の南の宜陽縣中に在り。宜陽は唐・宋のとき福昌縣となし。故に王氏の『田學紀聞』に「昌谷は河南福昌縣三郷の東に在り」といひ、張文潛に「春、昌谷に遊ひ長吉の故居と訪う詩」と「福昌懷古一章」とありて、寧ろ長吉の宅とせし、言はみな灼然として據るべし。註者數家ともに略して考えず。或いははしはらく詩中に「隴西長吉」の辭あるにより、遂に妄りに擬はかり、「地は隴西に在り」とせり（かかよ）認解は縁如しく、かえつて疣贅たり。

文中の王氏、名は應麟、張氏、名は耒、ともに宋ひとである。「原註」といふは註家の一人劉辰翁の註であつて長吉自らかえりしものではなからう。妄り

に擬したとあるのは、明と曾益が「昌谷の山居を憶う詩」に加えた註とをさすのであらう。

王琦のこの説は従来、諸解とおさえてほと定説たるの位置を占め、以来多くの長吉研究者はこれを補強敷演する。

世に賀は隴西に居すと稱するは大いに誤れり。晋よりこのかた門第を矜り尚とひき。文人、詞を屬りては先代の地望を喜び稱するも、必ず土著にしてしかいふにあらす。李白は西蜀に生れ、長安に寄し、しかも自ら「隴西成紀の人」と稱す。(中略)李を氏とする人の隴西をいふは唐にありては通じての例なり。(中略)夫れ賀をして長安以西に居らしむれば、すなわちその家(長安)に在りて、家を思ふの句に「家は遠く千里、雲脚は天の東の頭」といひ、「轅を東門の外に發し」といひ、「今よこに東道に下らんとし、祭酒して秦を別る」といひ、その家より京に詣るの句に「又よこに西へかた秦にゆかんとす」といひ、何ぞ東西顛倒するとの憂ふるや。「昌谷の山居を憶う」といひ、「犬

書曾て洛を去り、鶴存めて秦に遊ぶを悔かしと。その他、秦・洛對し  
學ぐ者、若はしばしば見ゆは、凡そ洛という者は家を指して言ひ、秦  
といふ者は京を指して言うなり。また「茅の廬山に之くを送る」にい  
う「洛郊、組豆なし」と。これ、その家の洛陽に在ること確にして疑  
義なし。(河北湖、昌谷別傳并注也)

(長吉は)河南府福昌縣の昌谷に居た。福昌はしとの宜陽である。

隋の宮名に因んで名とした土地で、西方十七里(中國の一里は日本の  
約六丁にあたり)に蘭昌宮があり、唐李吉甫元  
和群書志蘭香神女が天に上つた處で、宋政陽志  
輿地志西

南三十四里に女兒山があつて、唐李吉甫元  
和群書志蘭香神女が天に上つた處で、遺し

ていた。凡かある宋吳正十箋注、劉辰翁  
評真、李長吉歌詩昌谷水もまた縣の西にあり、甘水と

しに流れて洛水に注ぐ。宋王應麟困學  
紀聞、翁元所注昌谷は縣の三郷の東にあり、困學  
紀聞、王厚注隋

の故宮の北にあたり、送吉詩  
南園女兒山と嶺及相承け、その地は山に依り川を

てしはさんで南北に二つの園があり、桑や竹が叢生じている。(朱自清、李

賀年譜)

李賀が昌谷で生れたことはシカと疑いのないことだ。(周蘭風詩人

李賀)

周氏はこの断定の根拠として四つの理由をあげているが王琦、田北湖説を出していない。ところで王、田兩説から知られることは

I 長吉が昌谷に家居した。

II 昌谷は隴西ではなく、河南府福昌縣の一村路である。

III 隴西は長吉にとつては地望である。

地望といふのは先祖の出身の地、もしくははその姓のあらわれ、土地のことである。唐の皇室は隴西から出たから、その一族から出た長吉にとつてはその地は姓のあらわれ、ところである。ところが地望として人をよぶのは當時の習慣であつたから、長吉を「隴西の人」といふのは誤りではない。むしろむしろ周氏は「隴西の人」とあることを否定し、IとIIから見たら昌谷を長吉の「生れた土地」と断定する。望の地と家居の地とか必ずし一致しないように、家居の地と生地とも常に一致するもので

はなひてあろう。長吉の父の任地が何度か移動してゐてあろうこと、長吉集中に回想的にかなり頻出す江南の風光などもこの疑いといくらか關らなひでしなひ。ただ現在のわたくしには長吉が昌谷に家居したといふ以外のものを積極的に裏付けする何物もななひので、王、田、兩説に據つて朱自清が到達した地點にふんとどまをばはなひてあろう。

五 三十未育二十餘

長吉は若くして白玉樓中の人となつたけれど、その作品を概観すれば、行は三時期に分けることが出来る。

第一期は、詩作を始めたときから、いわゆる諱事件が發生まで。長吉の早熟な才能はつとに世人の賞讃の的であり、ことに當時才女は文豪として世に許された韓退之の知遇を得、その勧めで長安に出て進士の試験をうけようとするのである。長吉は希望に燃え、作品も比較的明ふい。

第二期は、諱事件以後、奉禮郎の職を辭して昌谷に歸るまで。

ここで一寸「諱事件」の説明をしておこう。この事件は、長吉の生涯に起つた最も大きな事件で、長吉の運命を決定し、彼の作品に最も大きく深いモティーフを與えたものだからである。

長吉は長安に出る前に予備試験ともいふべきものを河南府で受けてパスしてゐた。この時、韓退之は河南の令であつた。まもなく退之は長安に轉任した。長吉が上京したのはその前後であらう。進士の試かせまつたころ次のような説が京都に流れた。「長吉の父の名は晉肅である。その晉と進士の道とは音義相通う。すなわち長吉が進士の試につくのは父の諱を犯すことになふ。子たる者の謹んで避くべきところである」この説の出處は、長吉と名を争うものとも、さきに長吉に面會を求めて拒絶のはずかしめを蒙つた元稹たとも傳へる。いずれにしても長吉を快く思わぬ者より出たことは疑いない。事は長吉の上にとまらう。その推擧者たる韓退之にも又その形勢をなつた。退之はために「諱の辯」一篇を著して、その説の妄

なることを論駁した。かゝる理にしたがふ論は情に訴えず、説をおさえ得なかつた。長吉は、恐らくは累の師に至ることをおそれてであらう。試に就くことを断念して昌谷に歸るのである。しかしそれからしばらく後、再び長安に出て、閑職ながら奉禮郎の職を獲了。これも多分退之のけからいによゝるのであらう。そして退之門下の文人との交友もひらけず、東西兩洋の文化が混合する長安大都の繁華に身を置き、彼の詩作はにわかには活潑となり、絢爛と悲愁の混合した、いわゆる長吉體の詩が生れた。集中の約半数はこの時期の作であらう。

第三期は、第二期の終りの歸郷より死までである。

長安生活も病弱の長吉には長くは耐えず、三年の後、職を辭して昌谷に歸了。小康を得て、また昌谷を離れ、友人の張大徹をたよめて潞州に行き、數年後、昌谷に歸り、王もなく母たち、見守られながら死を迎えるのである。この時期は、いわゆる長吉體の絢爛が、悲哀に壓倒され、文字通りの鬼詩たる様相を示す。

と、ろてこの三つの時期は年代的にはいかなる年にかけるべきであろうか。これを知るには長吉の生卒年が検討されなければなるまい。そこでまた考證である。私はいささかうんざりしている。といつても、考證をやらかつたわけではない。やつた擧句かうんざりなめた。そのうんざりをもう一度じっくりかみしめて、そいつをさらに文字にする、思つただけであくひが出る。考えてもみたまえ。長吉が一體たれか先人の傳記の考證をとをやつたかどうか。斷じてない。何より證據に長吉には二百五十首のみたない詩とヤク序が若干あるばかりで、一篇の散文すら残されてない。これはこそ詩人の清潔さというのであろう。世には冷からんかへと考證ばかりやつて歩いて生命を終える奇特な人も少くないが、恐らくその奇特さは、朝夕のランシエ電車にもまれながらクイヌに執着する心情と相通い。さらにはクイヌ族を濫造する世の勢いとも関わりのてあろう。惚れた弱味で長吉の奥の奥するものならんでしかんでも咬え込んでひわくりまわりはして来たしこの、そんな姿かぶと鏡にうつされてみまるとゾツとする。

い、としこにて詩人を發業して科學者の假面をかぶるといふ手しないて  
はない。そこでは一應あらゆることが研究の對象であり、うんぬきをたと  
いふせいたくは押入木の隅へふしこんで、としかく積み上げさえすれば、  
そこはまたうまくいふもので、量より質への轉化などという有難い奇蹟も  
起つて來ようというものである。詩以上の詩だ。それに推理小説警昌の當  
世、こちらが恐縮しなから差出すものも意外舌鼓を打たねないものであ  
るまい。いやどうも、驚いたものだ。かとしかく車はレールを走り出して  
いる。急にストップさせて脱線でもすれば元も子もなくならう。推理小説  
愛好家諸君には私の文中に響けどもろもろの研究に直接當つて頂くことに  
して、結論だけをガツと次にひろげてみよう。

長吉の生卒年については凡そ三説ある

I 貞元六年庚午(760)生。元和十一年丙申(816)卒。

II 貞元七年辛未(761)生。元和十二年丁酉(817)卒。

III 貞元十年甲戌(764)同十五年戊寅(779)生。元和十二年丁酉(817)長

慶元年辛丑の事

I説ととる者には錢大昕（斂年録）鄭振鐸（中國文學者生存考）陸侃如（中國詩史）朱自清（李賀年譜）などがあり、II説をとる者に姚文燮（昌谷詩注凡例）王禮錫（李長吉詩傳）周閔風（詩人李賀）などがあり、III説ととるものは橋本循氏（李長吉と論ず）である。

I II兩説はともに杜牧の「李長吉歌詩叙」に「賀は生れてより二十七年にして死す」と太和五年……賀の死後凡そ十有五年、京兆の杜牧、其の叙を爲すと云ふに據り算出したもので、兩説に一年の差を生じたのは逆算の仕方相違があつたためである。方なれども、I説は逆算にあつて太和五年を基点として太和四年を第一年と見たに對し、II説は太和五年そのものを第一年としたのである。

III説はこれに對し、同じ杜牧の叙によるものの「賀の死後云々」の個所が續古逸叢書所收の影宋本「李長吉集」と楊守敬覆刻宋本「杜樊川集」には「十某年」、四部叢刊所收の景印金刊本「李賀歌詩篇」には「十有某年」

とあること(A)、四部叢刊所收の鐵琴銅劍樓藏舊鈔本『李義山文集』に「長  
生生れて二十四歳」とあること(B)、の二真を根拠としてゐる。

生存年數に「いはば舊唐書太平盛記が長に「二十四」とし、新唐書  
「吉」は「二十七」とするから、宋代に於いてすでに據るべき文献に二通り  
のものがあつたのであらう。

この異本のことについては、I II 説をとる人たちは顧みらなかつたわけ  
は全く、I 説をとる朱氏は(A)に於いては清華大學所藏『元刊文粹』九十三  
と明の隆慶本『文苑英華』七一四所引の杜牧の叙にひとしく「十五年」と  
あること、(B)に於いては長吉の友の沈亞之が『李膠秀才を送る詩の序』  
で「賀は年二十七、官は卒して奉常」といっていることを反證とし、II 説  
をとる周氏は長吉の「南園十三首」の第四の詩に「三十未有二十餘」の句  
の「あることと指摘し、もし長吉が二十四で死んでいたら、それは三十歳に程  
近いこととあらわす「三十未有」なる語は出さなかつたから、二十七  
歳説は動かさないと。周氏はこの説は極めて傾聴すべきであらう。

I II 兩説はとも III 説よりは疎るべきに近いようである。I II 兩説のう  
ち、おほかりに II 説に従つてゐよう。そこでさきの三時期は次の如く年  
次することおてさる。

第一期 徳宗貞元十六年庚辰より長吉十歳より憲宗元和五年庚寅の長  
吉二十歳まで。詩作開始の時期は不明だが、假りに十歳とした。  
第二期 元和六年辛卯より長吉二十一歳より元和八年癸巳の長吉二十  
三歳の春まで。

第三期 元和八年春より元和十二年丁酉の長吉二十七歳卒まで。

李商隱の書いた『李長吉小傳』には「長吉細瘦通眉長指爪能苦吟疾言」  
とある。ヤセギスで、兩眉はくつくほど濃く、爪が驚くほど長く、詩を  
吟むには苦吟したから、いつた人筆をとればたちどころに書き上げたとい  
つてゐる。

杜牧の叙によれば、長吉は死ぬ前に自ら家集を編み友を召した沈子明に授え  
てゐる。子明はこれをばらして四編としたが、すべて二百三十三首だ、た

と云う。現在われわれが見る長吉集は四巻二百十九首の本と、これにさら  
に外集一巻二十一首を加えた二百四十一首の本とがあり、王琦の竇笈樓本  
では、さらに郭茂竊樓日樂存詩集日樂存詩集所載の二首を補遺として加えている。  
彼の生涯の疑わしきを考へた上であらう二百五十首に満たない作品は決して  
多いとはいえない。けれども彼の製作はこれにとまらず、たゞはなく、自  
選して意に満たないものけごとく抹殺したのであらう。集中にはほとん  
ど駄作を見ないのはその證である。二百三十三首をこえる数は、長吉が存  
在することを欲せしめてしまし世に流傳したものと、後人が偽作して竄入し  
たものとであらう。誠に鍾伯敬が「李長吉詩辨」にいうごとく、「二百三十  
三首せに傳つて一字の亡ふるなきもの、皆長吉が文章の神カミいさのなすとこ  
ろなり」とある。

現存の長吉集には多くの異本があるが、私は主として王琦の竇笈樓本に  
より、その排列に従つて作品に一連番號を打つた。文中引用する作品に付  
したローマ數字は卷數・アラビヤ數字はその一連番號である。竇笈樓本を用

いたのは世に最も流布し、讀者にとつても比較的入手が容易であらうと思つたからに過ぎない。

方向第一流正誤

頁行

6 12 股服とが股のぞきとか  
4 14 おれは確かに土下座が習慣化  
していた封建時代の日本人が  
偶然に発見し

11 1

得していろ次第だ。兼好が  
しう、そ物狂  
である。兼好の徒然草がそれ  
を指摘してくれたのである。

7 1 た一つの極りて卒業を極めて  
後、親察のボイスだ、私の  
判断は、これは間  
ないのは不思議である、否兼  
好ほど、教養人にそんな忌趣  
味と説教する

21 1

軍服を身にまとい南方の戦線  
にまでつれて行かれたものだ。  
軍服は僕には  
当時の僕にはそれでも

14 善があらうか。現に彼は百五  
十四段に巧妙な实例を以て金  
我趣味を志すし  
てきたものは当然のことと自

26 14

てあつたという事實を餘りに  
も先入見的に  
冷えむえした砂の上に マン  
モス、骨の堆 ステゴトシの  
骨の堆

1 14 現に彼は百五  
十四段に巧妙な实例を以て金  
我趣味を志すし  
てきたものは当然のことと自

30 14

冷えむえした砂の上に マン  
モス、骨の堆 ステゴトシの  
骨の堆

1 14 現に彼は百五  
十四段に巧妙な实例を以て金  
我趣味を志すし  
てきたものは当然のことと自

31 1

人間の骨の堆 鼠の骨の堆

53

のは弘法大師の御利益で方。  
南無大師遍照金剛……私らほ

52

とくた所てと

とこらか同じ華族てし豊華原  
の華族は懐疑のない華族から

51

こそあ

宗教もいつてもゴロツキ政治の

50

鹿しい偶像

狂して随喜の姿……ほして

49

た 大郎殿者ら……ヒネリ

48

オらほとんど行われたいな

47

未定たりか……ナクさ

# 方 向

第一號

非賣品

昭和二十八年三月二十日發行

編輯發行人

中 新  
原 田 憲 雄

京都市上京區下長者町通千本西  
入福島町三七四 妙 徳 寺 内

發行所

方 向 社